

北田遺跡

第2次発掘調査報告書

1982

山形県
山形県教育委員会

き た だ

北 田 遺 跡

第 2 次 発 掘 調 査 報 告 書

昭 和 5 7 年 3 月

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和56年度に実施した北田遺跡第2次発掘調査の成果をまとめたものであります。

国指定の史跡として、古代出羽国の国府に擬定されている「城輪柵跡」、また古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」をふくむ酒田市東部の水田地帯は、埋蔵文化財の宝庫であります。城輪柵跡の南に位置する東平田地区も古くから土器類や柱根が出土する地として知られ、国府に関連する遺跡が存在するとの推測もなされました。

このたび、昭和55年度に引き続いだ北田遺跡が、本年度施工予定の県営ほ場整備事業（東平田地区）区域内にふくまれることになったので、関係各機関と協議の結果、事前に緊急発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存をはかることになりました。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財保護行政との調整は重要な課題であり、県教育委員会においても今後鋭意努力を続けてまいいる所存であります。

調査の結果、平安時代の一般庶民の集落跡があらわれ、東北古代史の研究上、貴重な資料を得ることができました。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及をもかねて、皆さまの一助となれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたって多大な御協力をいただいた関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和57年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

1. 本書は、山形県教育委員会が昭和56年度に山形県農林部の委嘱を受け、山形県埋蔵文化財緊急調査団が実施した、県営ほ場整備事業（東平田地区）に係わる酒田市北田遺跡第2次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、酒田市教育委員会並びに日向川土地改良区などの関係諸機関の協力を得て実施した。調査期間は、昭和56年7月13日から9月5日（延33日間）までである。
3. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会
調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団
調査担当者 佐藤庄一（主任調査員）〔庄内教育事務所埋蔵文化財調査係長〕
野尻 侃（現場主任）〔庄内教育事務所技師〕
安部 実（調査員）〔庄内教育事務所技師〕
事務局所長 小嶋茂太〔庄内教育事務所長〕
所長補佐（総括担当）藤塚真一〔庄内教育事務所次長〕
所長補佐（庶務担当）大須賀芳夫〔庄内教育事務所総務課長〕
所長補佐（業務担当）村岡 敏〔庄内教育事務所社会教育課長〕
事務局員 菅原 猛〔庄内教育事務所総務主査〕

4. 本書の作成は、佐藤庄一・野尻 侃・安部 実が担当・執筆した。写真撮影は安部 実、編集は野尻 侃、全体については佐藤庄一が統括した。
挿図・図版作成にあたっては、中村敬三・石井 節・水落みち子がこれを補助した。
5. 挿図縮尺は、各遺構について $\frac{1}{100}$ ・ $\frac{1}{50}$ 、遺物については $\frac{1}{50}$ を基本とした。図版遺物の縮尺は $\frac{1}{50}$ を基本とした。

挿図中の記号は、S B—建物跡、E B—建物を構成する柱穴、S K—土壙、S D—溝状遺構、S E—井戸跡、また遺物についてはR P—土器・土製品、R Q—石製品、R W—木製品で示し、一連番号を付した。遺構内覆土はF 1・2……で表現する。
出土遺物観察表中計測値で（ ）内の数値は図上復元による。

目 次

序

例 言

I 遺跡の概観

1. 立地と環境	1
2. 調査に至る経過	4
3. 調査の経過	4
4. 遺跡の層序	5

II 遺構

1. 建物跡	8
2. 井戸跡	15
3. 土 壤	20
4. 溝状遺構	21

III 遺 物

1. 建物跡出土の遺物	22
2. 井戸跡出土の遺物	26
3. 土壌内出土の遺物	34
4. 溝状遺構出土の遺物	34
5. 包含層出土の遺物	39
6. 墨書き器	40

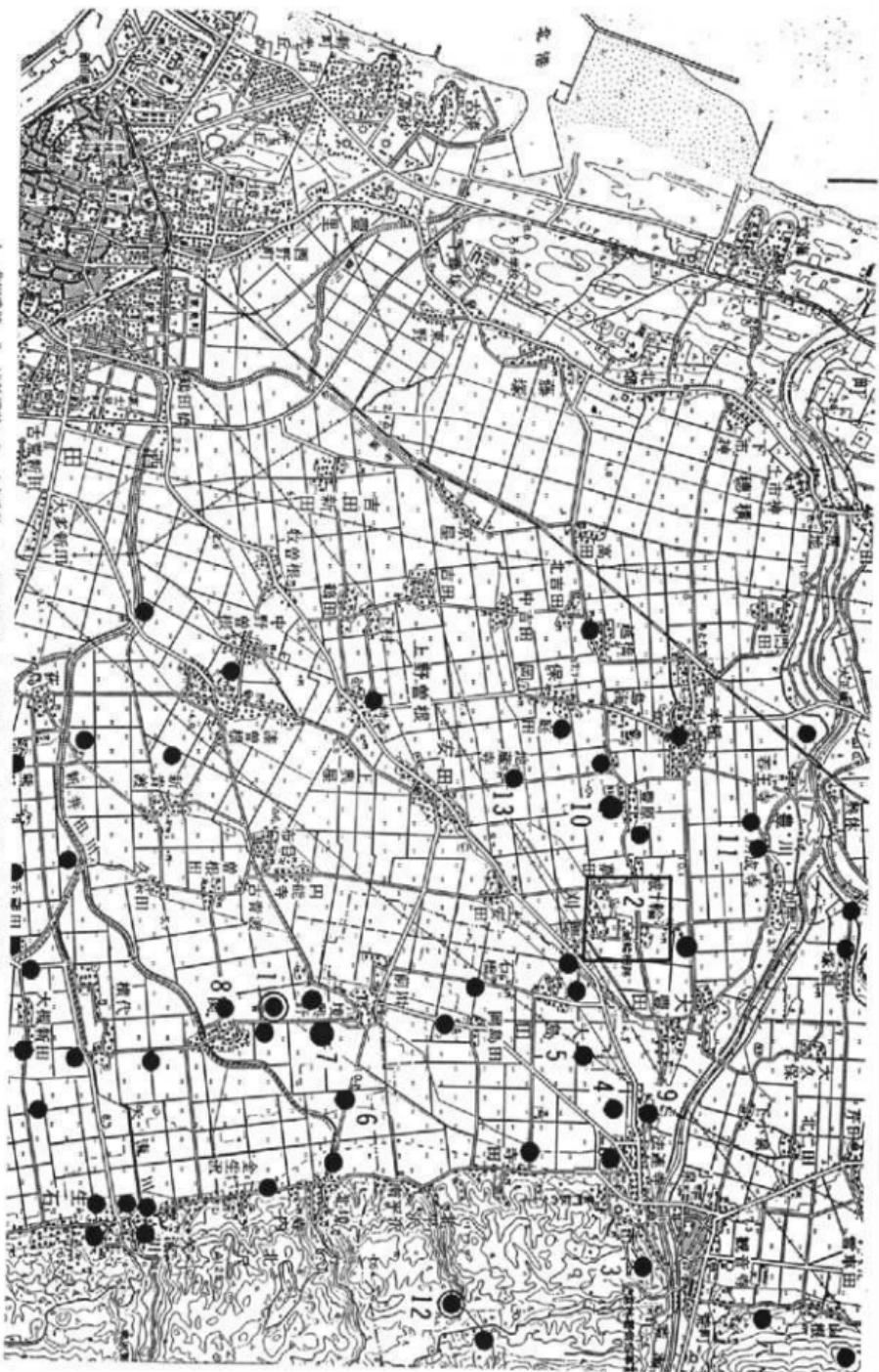
IV まとめ

1. 遺跡の時期と性格について	41
2. 井戸跡について	42

挿 図 目 次

図 版 目 次

第1図 遺跡位置・分布図	1 図版1	北田遺跡遠景・北田遺跡近景
第2図 グリッド配置図	3 図版2	北田遺跡周辺航空写真
第3図 土層図	5 図版3	精査区近景・精査区北西側
第4図 遺構配置図	6 図版4	精査区南側・精査区北側
第5図 S B140・180建物跡	9 図版5	S B140建物跡・S B180建物跡
第6図 S B170建物跡	11 図版6	S B140建物跡柱穴
第7図 S B200・210建物跡	12 図版7	S B170建物跡・S B210建物跡
第8図 S B190建物跡	13 図版8	S B190・200建物跡・S E107・109井戸跡
第9図 S E107・109井戸跡	16 図版9	S E107・109井戸跡・S E107井戸跡土層
第10図 S E159井戸跡	18 図版10	S E107・109井戸跡・S E109井戸跡出土状況
第11図 土壌	19 図版11	S E159井戸跡・S E159井戸跡
第12図 建物跡出土遺物	25 図版12	S K59・60・61土壤
第13図 S E1	27 図版13	S K63・67・95土壤
第14図 S E109井戸跡出土遺物(1)	28 図版14	S K108・110土壤・S D84溝状遺構
第15図 S E109井戸跡出土遺物(2)	30 図版15	建物跡出土遺物
第16図 S E159井戸跡出土遺物	31 図版16	S E107井戸跡出土遺物
第17図 S E159・109井戸跡出土井戸枠・矢板	32 図版17	S E109井戸跡出土遺物(1)
第18図 土壌出土遺物	35 図版18	S E109井戸跡出土遺物(2)
第19図 溝状遺構出土遺物	36 図版19	S E159井戸跡出土遺物
第20図 包含層出土遺物	38 図版20	S E159・109井戸跡出土井戸枠・矢板
第21図 庄内地方の井戸跡(1)	43 図版21	S E159井戸枠文字
第22図 庄内地方の井戸跡(2)	44 図版22	土壤出土遺物
付 表	図版23	溝状遺構出土遺物
表1 遺構内出土土器点数表(1)	23 図版24	包含層出土遺物
表2 遺構内出土土器点数表(2)	24	
表3 建物跡出土遺物観察表	25 表8	土壤出土遺物観察表.....37
表4 S E107井戸跡出土遺物観察表	29 表9	溝状遺構出土遺物観察表.....37
表5 S E109井戸跡出土遺物観察表	29 表10	包含層出土遺物観察表.....39
表6 S E159井戸跡出土遺物観察表	30 表11	黒岩土器観察表.....40
表7 S E159・109井戸跡出土井戸枠観察表	33 表12	庄内地方井戸跡出土例一覧.....45



第1図 遺跡位置・分布図

I 遺跡の概観

1. 立地と環境（第1図、図版1）

日本有数の大河である最上川は、庄内平野を刻み込むように緩やかな曲流を示しつつ西下し、日本海に注いでいる。越後地方ともよばれる庄内平野の北半部の地形は、大別して東側の出羽丘陵地域と西側の庄内北部平野地域に区分される。平野地域はさらに東から、(1)庄内北部河間低地、(2)酒田北部三角洲、(3)庄内北部砂丘の3つに細分される。

庄内北部河間低地には、自然堤防・後背湿地・狹義の河間低地の三者を含んでいる。このうち自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田・漆曾根・布目などにあり、観音寺から南西に放射状に分布する。しかし、これらの自然堤防は高度が低く、不明瞭なものが多い。後背湿地の明瞭なものは、生石西方や上村付近などにみられる（註1）。

北田遺跡は、酒田市大字閑字北田に所在する。酒田市街の東方6.3km、閑部落北側の水田中にあり、標高は約9mを測る。閑部落より境興野部落にいたる1kmの幹線道路沿いには、北から境興野・北田・閑Bの3遺跡がつらなっている。北田遺跡はその中間に占め、幹線道路の東西にまたがって広がるが、そのうち農道の西側には都波岐神社と諏訪神社が現在も残っている。都波岐神社は、いま諏訪神社に合祀されて水田中にわずかにその痕跡を残すにすぎないが、諏訪神社は延長年間（923～931年）に信濃より勧請したと伝えられる古社である。林に囲まれた中に立派な社殿が建ち、広い社地を有している。

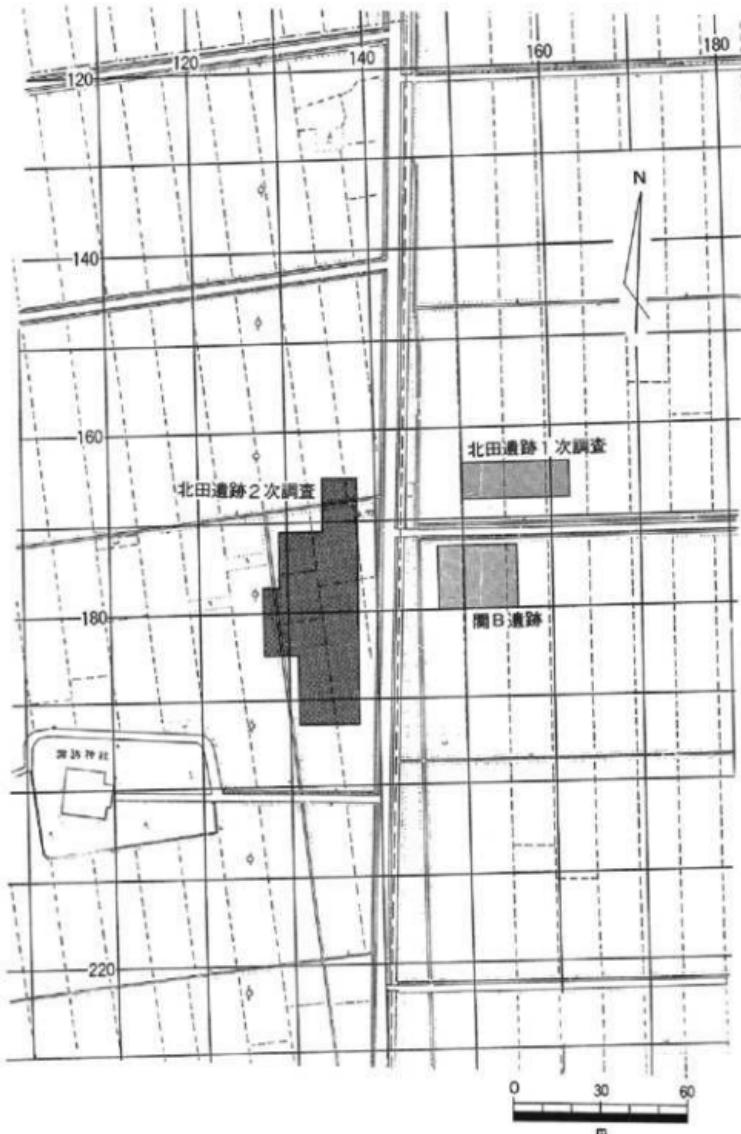
北田遺跡より北北西3.1kmのところには、平安時代における出羽国の行政の中核である国府に擬定される城輪柵跡があり、これを中心に酒田市東部から八幡町にかけて、平安時代の官衙跡や集落跡が数多くみられる。城輪柵跡の東方1.5kmには国分寺に疑せられるむきもある堂の前遺跡（註2）、さらに東方3kmの出羽丘陵の段丘上には、「三代実録」仁和3年（887年）の条により一時的に移転した出羽国府との説もある八森遺跡（註3）がある。また北田遺跡の北東1kmにある上ノ田遺跡からは、官衙跡を推測させる掘立柱建物跡や多量の墨書き土器が検出されている（註4）。さらに大槻新田から手藏田にかけては、墨書き土器を含む多くの土器や円柱根などが発見されており、古代の公的施設が存在した可能性もある。北田遺跡東側の低丘陵地帯には、中世の板碑や館跡も多く、まさにこのあたりは平安時代から中世にかけての遺跡の宝庫ともいえる。

註1 山形県 1978 「土地分類基本調査 酒田 5万分の1」

註2 川崎利夫 1982 「出羽国分寺はどこにあったか」 津陽文化114

註3 佐藤裕宏 1979 「仁和三年条の国府移転に関する覚書」 庄内考古学16

註4 山形県教育委員会 1982 「奥林・土木事業関係遺跡報告書 上ノ田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第52集



第2図 グリッド配置図

2. 調査に至る経過

酒田市の東部水田地帯に位置する北田遺跡は、地元の伊藤安記氏によって早くから注目され、昭和38年発行の「山形県遺跡地名表」にも登録されている。また昭和53年発行の「山形県遺跡地図」にも、遺跡番号2020—平安時代の集落跡として記載されている。

昭和55年度以降この地域が県営ほ場整備事業(東平田地区)にかかることになったため、昭和54年度より関係諸機関との協議を経て、昭和55年度に幹線道路東側の緊急発掘調査(第1次調査)、昭和56年度に幹線道路西側の緊急発掘調査(第2次調査)を実施したものである。なお昭和55年度には境興野遺跡と閔B遺跡の発掘調査も同時に行なっている。

この時の調査では、境興野遺跡で掘立柱建物跡2棟・土塙28基(註1)、北田遺跡で掘立柱建物跡1棟・土塙1基(註2)、閔B遺跡で掘立柱建物跡3棟・土塙2基・井戸跡1基(註3)が検出されている。また北田遺跡と閔B遺跡は、遺構が隣接していることや遺物の検討などから同一の集落跡と判断され、その範囲も道路西側まで大きく広がっていることがわかった。

註1 山形県教育委員会他 1981 「境興野遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第46号

註2 山形県教育委員会他 1981 「北田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第48号

註3 山形県教育委員会他 1981 「閔B遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第47号

3. 調査の経過(第2図、図版2)

発掘調査は、昭和56年7月13日から同年9月5日までの実質33日間にわたって実施した。調査対象地域の地区割りは第1次調査と同様な基準線を用い、3m四方を1単位としてX軸(東西軸)は西から東に、Y軸(南北軸)は北から南に第4象限で座標をとった。南北基準線の方針は真北に対し3度29分西に傾く。

調査はまず遺跡の範囲を確認するために、1×2m幅の坪掘りを東西270m、南北230mの範囲に170ヶ所実施した。つぎに遺構や遺物の検出地区1,900m²(127~136-171~192グリッド)を精査地区として選定し、この地区的表土を重機械で粗剥ぎしたのち面整理をしながら遺構の検出を行なった。旧盆の8月13日を中心点として、前半は遺構検出を主な作業としている。またこれと平行して、精査地区の南側から順に遺構の精査も行ない、平面図などの記録作成や写真撮影をしている。

盆明けの8月17日から調査は後半に入り、遺構の密度も精査地区的北側にいくにしたがって多くなってきたので、さらに北側を400m²程追加拡張した。これに伴って遺構がまったく認められなかった精査地区南西隅を一部精査地区から除外したため、最終的な精査面積は1,953m²となっている。

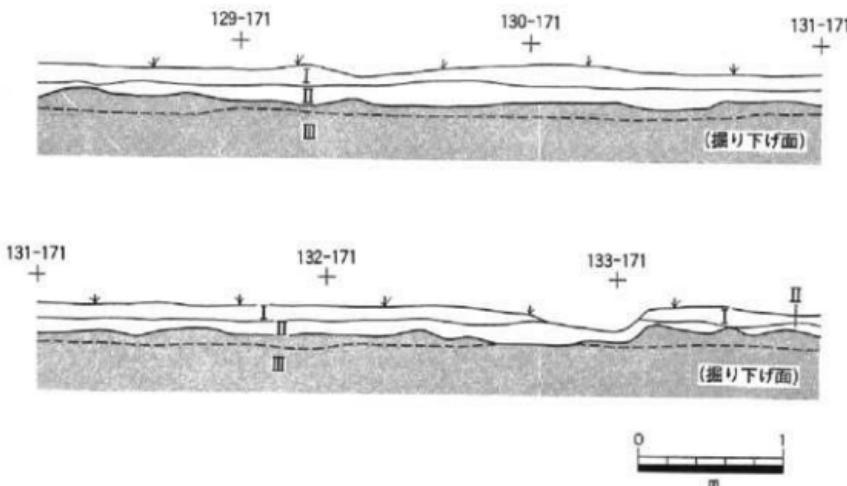
4. 遺跡の層序（第3図）

今回の調査対象地区は、現在周囲より30cm程高い微高地となっているが、微視的には東方の出羽丘陵や遺跡の南方700mを西流する新井田川の沖積作用に伴って、幾分北東から南西にかけて低くなっている。

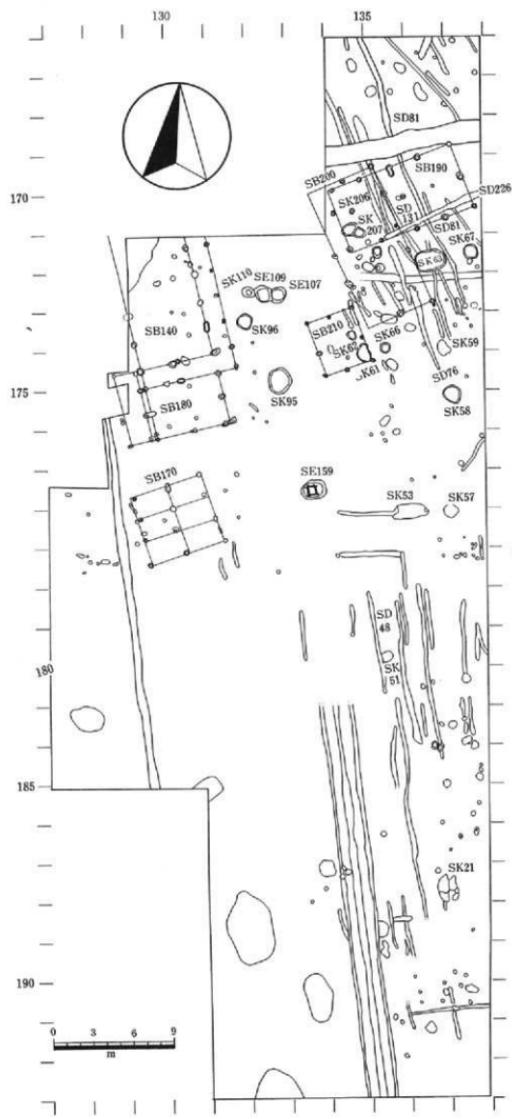
本遺跡を覆う表層の地質は、粗砂・シルトおよび粘土からなる沖積層で、かなりグライ土壌化が進んでいる。これと関連し地下水位も一般に高い。

本遺跡の基本的な層序は、2次調査精査地区北西部の127~133-171グリッド北壁によつて確認した。第3図はその一部である。

- 第Ⅰ層 明茶褐色微砂 稲カブの根が入り込み、やや粘性をもつ水田の耕作土である。土層の厚さは8~15cmで、第Ⅱ層との境界に厚さ3cm前後の滯水面をもつ。
- 第Ⅱ層 暗褐色砂質土 炭化粒子を含み、硬くしまつてゐる。部分的に第Ⅲ層青灰色粘質土がまだらに混る。平安時代から宝町時代にかけての遺物包含層で、厚さ5~15cmを測る。
- 第Ⅲ層 青灰色粘質土 色調は全体的に青灰色を呈し、部分的に酸化作用により濁黄褐色を示したり、粗砂を含む。遺物をまったく含まず、各遺構の壁や底面をなす。



第3図 土層図



第4図 造構配置図

II 遺構

今次の調査で検出された遺構には、建物跡6棟、井戸跡3基、土壙27基、溝状遺構、ピットなどがある。建物跡や井戸跡は、精査地区の内でもとくに北半部に集中して発見された。精査地区的南半部にも土壙やピットが部分的に検出されているが、明確な建物跡を構成するまでには至っていない。溝状遺構は南北方向に延びるものが多いが、一部埋土や地層の掘り込み面からみて新しい時期のものも混っている(第4図)。

1. 建物跡(第4図、図版3・4・8)

建物跡は全部で6棟分検出されている。検出地域からみて、精査地区北西隅の3棟と同北東隅の3棟の2群に分かれる。以下各建物跡毎に記述する。

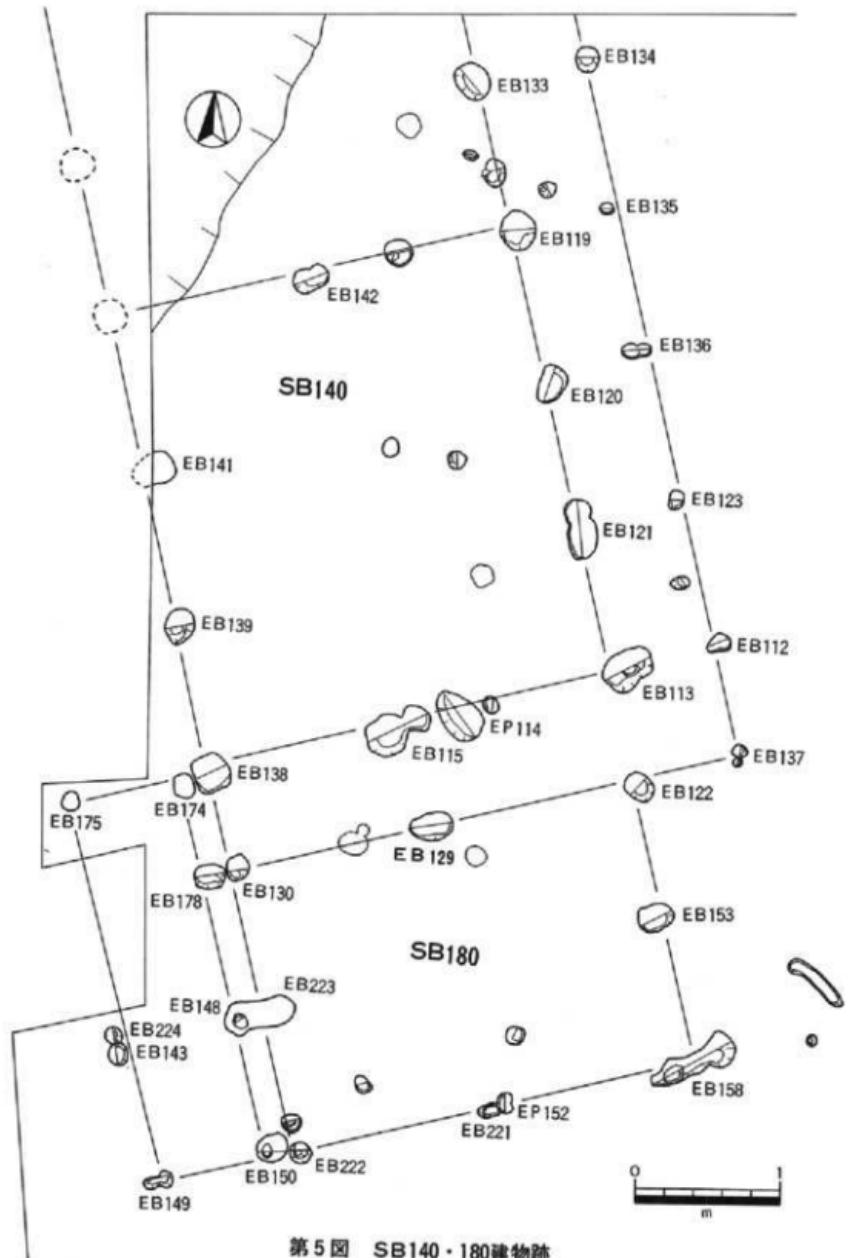
(1) SB140建物跡(第5図、図版5・6) 精査地区北西隅129~131・171~174グリッドで確認された梁行2間、桁行4間以上の南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の北半部が未検出なため全体の規模は不明であるが、現段階では身舎の東側と南側に庇ないし縁東が付く。身舎の梁行長は5.7m、桁行長は検出範囲で8.4mを測る。柱間距離は、身舎南北梁E B 113・115・138で東から3.0m(約10尺)、2.7m(約9尺)、桁行東面E B 133・119・120・181・113で2.1m(約7尺)等間である。E B 119の西3.0mの所に間仕切用と思われる柱穴(E B 142)があり、これから考えると桁行は5間程度になることが推測される。南北主軸方位は、真北を基準としてN-16°10' -Wである。

東面と南面の庇ないし縁東柱の柱間距離は身舎と同様で、身舎からの幅は各々1.5m(約5尺)等間である。

柱穴掘り方の、身舎のものが直径40~70cm、検出面からの深さ21~32cmの円形ないし梢円形、底部が直径20~40cm、深さ12~31cmの円形ないし梢円形を呈する。柱は抜きとられたり、朽ちて柱根が残っているものはないが、身舎部は柱のアタリなどから直径21cm前後の角柱を利用した可能性がある。

柱穴掘り方の埋土はほぼ3層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。柱アタリ部の埋土は炭化粒子を多く含む暗灰褐色粘質土である。

本建物跡柱穴のうち12ヶ所から土器片が出土している。土器には赤焼土器(第12図4・5・6・7・9)、須恵器(同図3)、土師器があり、総数232片を数える。土器の形態や調整手法などからみて、SB140建物跡の時期は平安時代10世紀中葉から後半頃に推定される。



第5図 SB140・180建物跡

(2) SB180建物跡(第5図、図版5) SB140建物跡の南側に隣接した128~131・174~176グリッドで検出された建物跡である。棟通りなどからみてSB140建物跡と同一建物とも考えられるが、柱間距離や柱穴掘り方の大きさなどから推して、東面と南面に庇様のものを持つSB140建物跡が建てられてからしばらく後に追加施設として構築されたものと考える方が妥当である。

SB180建物跡は、便宜上東半部と西半部の2つに分けて考えることができる。東半部はSB140建物跡の入側通りをそのまま2間南に延長したもので、桁行相当部の柱間距離は北から各々1.8m(6尺)、2.1m(7尺)を測る。梁行相当部の長さは、EB158・221・222で、東から3.0m(10尺)、277m(9尺)を測る。西半部は東西1間、南北3間分をSB140建物跡南西隅に隣接して構築したもので、東西の柱間距離は約1.5m(5尺)、南北の柱間距離は、北から各々1.5m、1.8m、2.1mを測る。EB175・224・149の柱穴掘り方や東西間尺からみて、縁東の可能性もあるが、SB140建物西側柱列の状況が不明なため断定はできない。

柱穴掘り方は、直径25~50cm、深さ14~27cmを測り、埋土はSB140建物跡柱穴と同様である。本建物跡の柱穴は、全体的に小ぶりで深さが浅い。

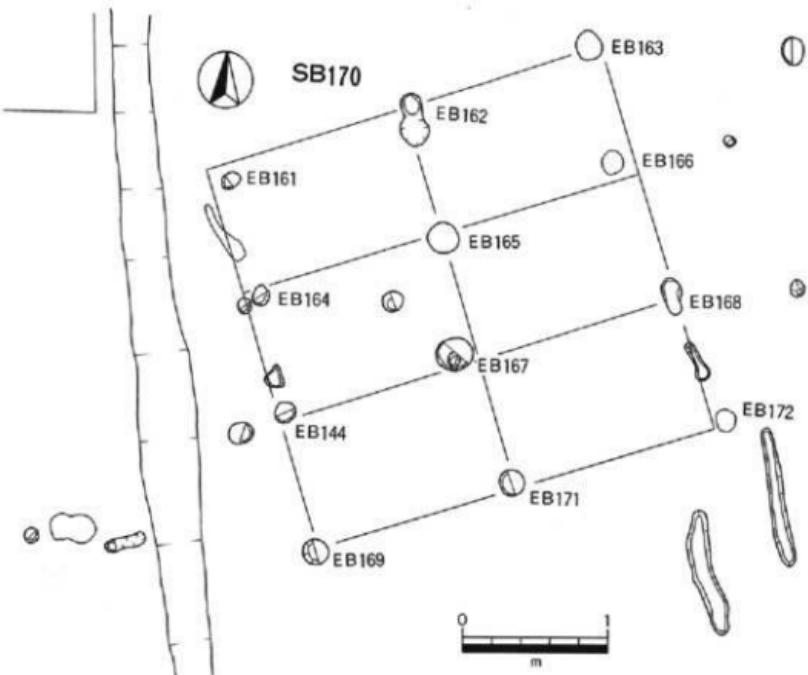
SB180建物跡柱穴EB148・158・174・176から赤焼土器と須恵器(第12図2)が21片出土している。SB180建物跡の時期は、土器の中で新しいものをあてて10世紀後半頃になる。

(3) SB170建物跡(第6図、図版7) SB140建物跡の南方129~131~177~179グリッドで検出された倉庫跡と思われる総柱の建物跡である。梁行長5.7~6.0m桁行長5.4mを測り、南北主軸方位はN-20°10'~Wである。柱間距離は、北面梁EB161・162・163で東から2.7m等間、南面梁EB169・171・172で3.0m等間、桁行東西EB163・166・168・172で北から各々1.6m、2.0m、1.8m、桁行東西EB161・164・144・169で北から各々1.7m、1.6m、1.8mである。各柱間距離は少しずつ異なる。

柱穴掘り方は、直径20~50cmの円形ないし梢円形を呈し、過構検出面から底面までの深さは10~22cmを測る。柱は抜きとられたり、朽ちたりして残っているものはないが、柱アタリなどの観察からみて直径18cm前後の丸柱の可能性がある。柱穴のうち建物跡の中央部にあたるEB165・167は、とくに柱の掘り方が大きく深い。

本建物跡の南東隅約1mに幅20~30cm、長さ1.8m、深さ5cm前後の溝状遺構(SD160・179)があり、桁行と方向をほぼ同じくするが、水田耕作のためかさらに北には延びない。

柱穴掘り方の埋土は2層に分けられ、暗青灰色粘質土を基調としている。遺物はEB163からのみ須恵器と赤焼土器合せて7片出土している。土器の形態や底部の切り離し技法からみて、SB170建物跡の時期は平安時代10世紀後半頃と推定される。

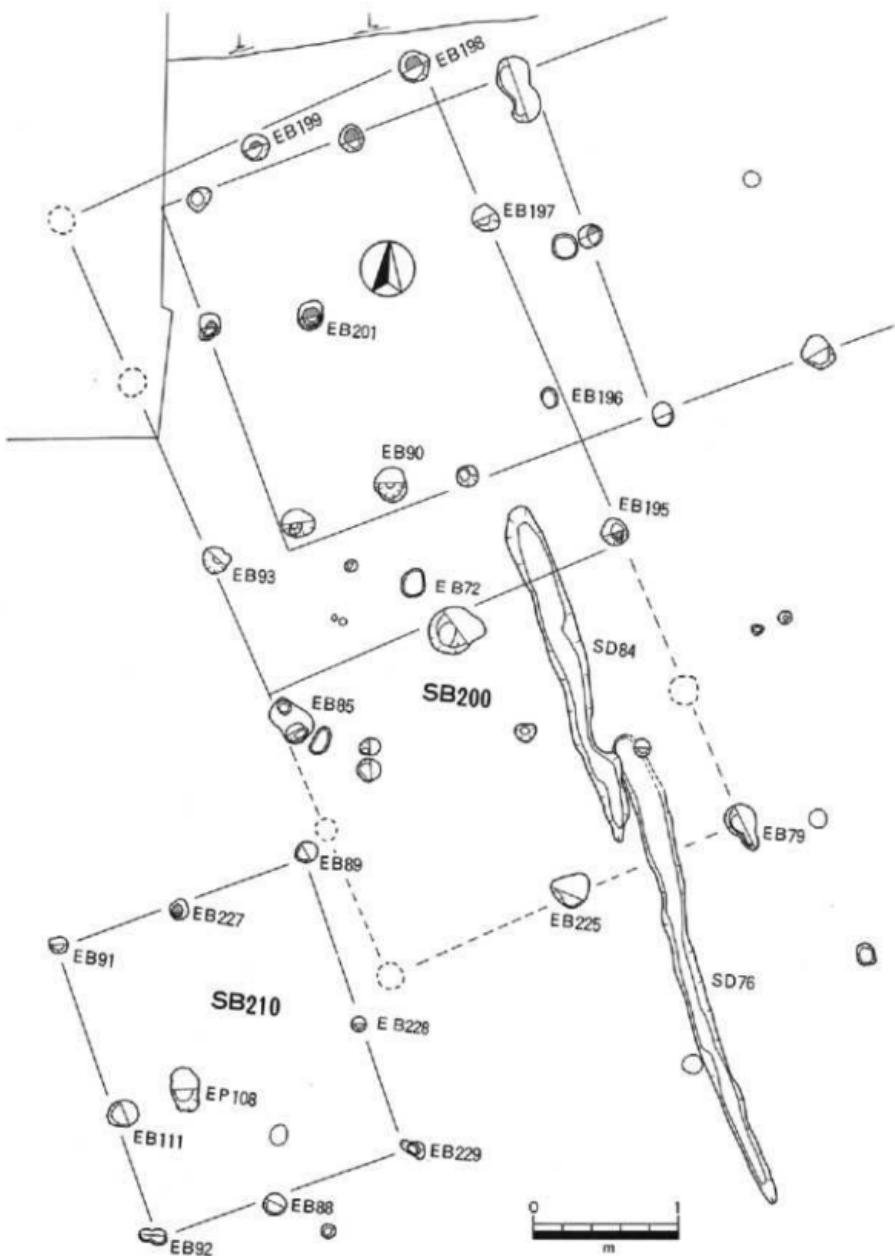


第6図 SB170建物跡

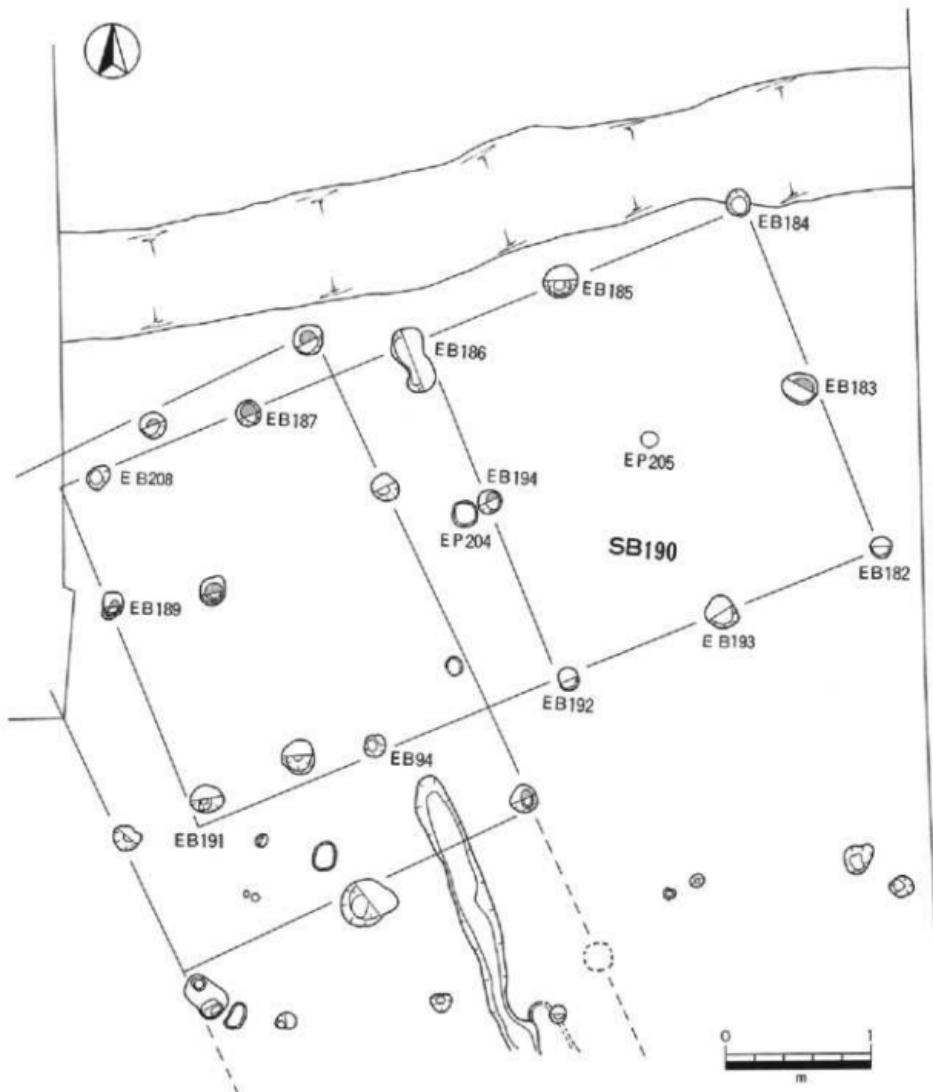
(4) SB200建物跡(第7図、図版4・8) 精査地区北東隅133~135-169~173グリッドで確認された梁行2間、桁行3~5間の南北棟の掘立柱建物跡である。建物跡の南半部が新しい時期の溝状造構によって切られているため正確な規模について疑問もあるが、棟通りの方向や柱間距離からE B79・225まで含めた大きさを想定しておきたい。

梁行長は5.4m、桁行長は11.3mを測り、南北主軸の方位はN-27°-Wである。柱間距離は、中央梁E B196・90・93で2.7m(9尺)等間で、北面梁E B199・198、南面梁E B79・225の柱間も2.7mである。桁行東面E B198・197・195・196・78では、北から各々2.4m、2.6m、2.1m、4.2mを測り、E B195とE B79との中間にもう1個柱穴が想定される。建物跡の中央南北方向にE B201・90・72の柱穴が確認されており、床張りの可能性もある。

柱穴掘り方は、直径35~70cm、検出面からの深さ14~36cmの円形ないし楕円形を呈する。柱は抜き取られたり、朽ちてしまつて柱根は残っていないが、柱アタリなどの観察からみて、直径21cm前後の角柱を考えられる。柱穴掘り方の埋土はほぼ3層に分けられ、暗青灰色砂質粘土を基調としている。柱アタリ部の覆土は、炭化粒子を多く含む暗灰褐色粘質土である。



第7図 SB200・210建物跡



第8図 SB190建物跡

本建物跡の柱穴のうちE B72・195・196・199・201の5ヶ所から土器片が出土している。土器には赤焼土器、須恵器があり、総数14片を数える。土器の形態や調整手法からみて、時期は平安時代10世紀中葉頃と推定される。S B200建物跡と北半分が重複しているが、柱穴の検出状況や遺物の内容からみて本建物跡がやや古くなるようである。

(5) S B210建物跡(第7図、図版7) S B200建物跡の南西隅133～135—172～174グリッドで検出された梁行2間、桁行2間の倉庫風の建物跡である。

梁行長は3.6m、桁行長は4.2mを測り、南北主軸の方位はN-22°40' -Wである。柱間距離は、北面梁E B89・227・91で1.8m(6尺)等間、南面梁E B229・88・92で東から1.9m、1.7m、桁行東面E B89・228・229、桁行西面E B91・111・92とも北から2.4m(8尺)、1.8m(6尺)である。

柱穴掘り方は、直径18～40cm、検出面からの深さ11～40cmの円形ないし梢円形を呈する。柱は抜き取られたり、朽ちてしまつて柱根は残っていないが、柱アタリなどの観察からみて、直径15cm前後の丸柱が考えられる。柱穴掘り方は2層に分けられ、暗青灰色砂質粘土を基調としている。柱アタリ部の覆土は、炭化粒子を多く含む暗灰褐色粘質土である。

本建物跡の柱穴内からは遺物がまったく認められなかった。

(6) S B190建物跡(第8図、図版4・8) 精査地区北東隅134～137—168～171グリッドで検出された梁行2間、桁行4間の東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の東側が新しい溝状造構によって切られたり、未発掘地域になっているため、桁行が東側にさらに伸びる可能性もある。建物跡の西半でS B200建物跡と重複している。

梁行長は5.0m、桁行長は10.2mを測り、南北軸の方位はN-23°10' -Wである。柱間距離は、東面梁E B184・183・182、中央梁E B186・194・192で2.5m等間、西面梁EB208・189・191で北から1.8m、3.0mである。桁行北面E B184・185・186・187・208で東から各々2.7m、2.4m、2.4m、2.4m、桁行南面E B182・193・192・94・191で北から2.4m、2.4m、2.7m、2.7mを測る。

柱穴掘り方は、直径30～50cm、検出面からの深さ18～45cmの円形ないし梢円形を呈する。柱は抜き取られたり、朽ちてしまつて柱根は残っていないが、柱アタリなどの観察からみて、直径18cm前後の角柱が考えられる。

本建物跡の柱のうちE B183・185・186・187・192・193・194の7ヶ所から土器片が出土している。土器には赤焼土器(第12図8)、須恵器、土師器があり、総数141片を数える。土器の形態や調整手法などからみて、S B190建物跡の時期は平安時代10世紀後半頃と推定される。

2. 井戸跡

S E107・109井戸跡(第9図、図版9-10)

精査区北西部。S B140建物跡の東方4m, 132-172グリッドⅢ層上面で確認された井戸跡である。当初円形を呈する土壌が三基重複しているものと考え、その先後関係を精査するために、東西に半截する断面観察を行なった。その結果、2基の井戸跡を示す板材や曲物を検出した。以下に土層の観察を示す。

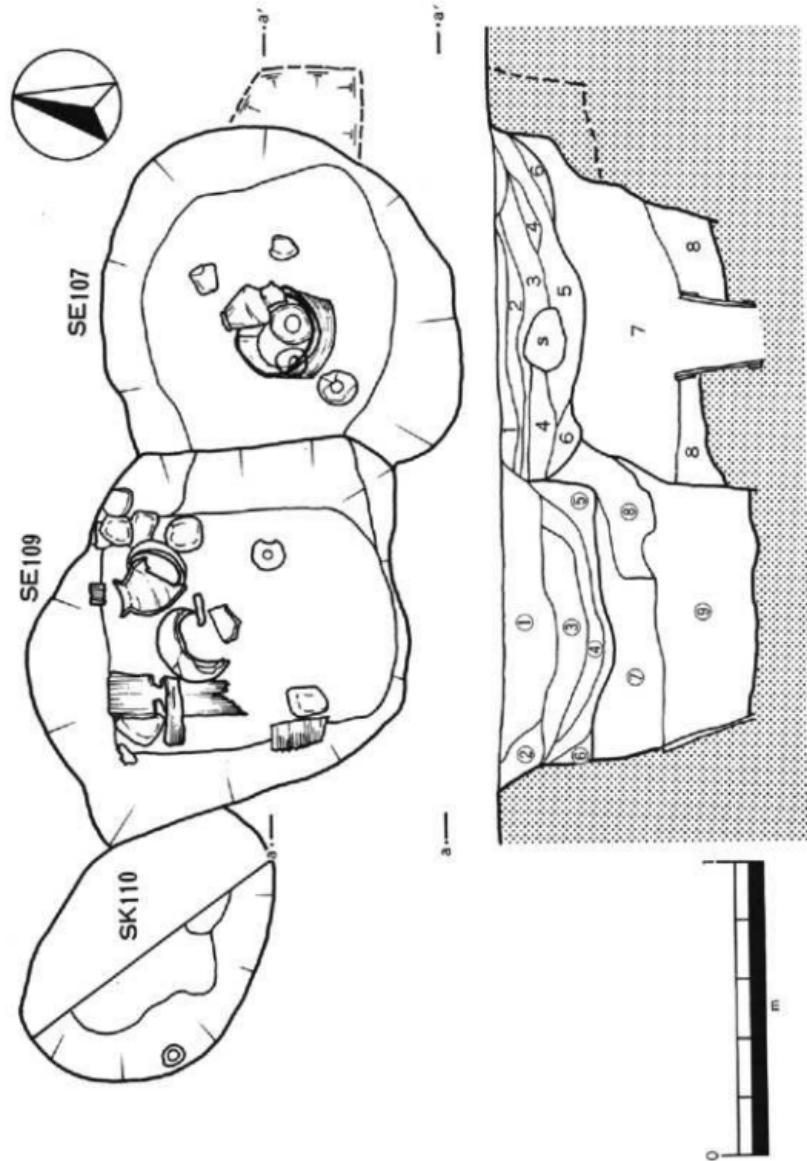
S E107井戸跡土層

- 1 明青黒色砂質土層 (炭化物を霜降り状に含む。土器片少量)
- 2 青黒色砂質土層 (炭化物を霜降り状に多く含む。土器片多量)
- 3 黒色炭化物層 (完形土器を多く含む)
- 4 暗青灰色微砂層 (炭化物と土器片を含む)
- 5 濁青黒色粘質土層 (炭化物をブロック状に含む。土器片微量)
- 6 暗青灰色粘質土層 (炭化物・土器を微量に含む)
- 7 暗青灰色シルト (強粘性・炭化粒子・土器含む) と暗褐色シルト (強粘性・炭化物粒子・土器含む) が一部はしま状に、一部はまだらにまじる。
- 8 暗青灰色細砂質層 (暗青灰色シルト細砂質と暗褐色シルトがまじる)

S E109井戸跡土層

- ① 青黒色砂質土層 (炭化物を霜降り状に含む。土器少量)
- ② 明青黒色砂質土層 (炭化物を微量に含む。同壁崩壊土?)
- ③ 黒褐色炭化物層 (灰分が多く、土器を少量含む)
- ④ 暗青黒色微砂層 (炭化物をブロック状に多く含む。土器少量)
- ⑤ 青黒色砂質土層 (炭化物を霜降り状に含む。土器少量)
- ⑥ 明青黒色微砂層 (炭化物を微量に含む。周壁崩壊土?)
- ⑦ 暗青黒色粘質土層 (炭化物をブロック状に含む。土器多量)
- ⑧ 濁青灰色砂質土層 (炭化物・土器を微量に含む)
- ⑨ 濁青黒色粘質土層 (炭化物をブロック状に含む。土器多量)

以上大きく層序を記したが、井戸跡の覆土として不規則な観察結果である。2つの井戸跡の中位では、炭化物を多量に含む層が間層として存在している。これを井戸が廃棄されたのちの捨て場と考え、S E107の層序で1~6層をS E107-a土壌、S E109の層序で①~⑥をS E109-b土壌と仮称すれば、土層の観察によりその先後関係はS E107井戸跡→S E109井戸跡→S E107-a土壌→S E109-b土壌になる。S E107は径約120cm、深さ90cmの円形を呈した掘り込みをもち、中央部に径28.5cm、高さ25.3cm、厚さ5mmの曲物を



第9図 SE107・109井戸跡

設置している。曲物は一枚の杉材を一重に巻き、重なる部分に木釘と桜皮により留めている。さらに外側の上部を幅4.5cm、厚さ4mm、下部を幅3.5cm、厚さ4mmの曲物で留められている。出土遺物は、曲物の上にかぶさる状態で、須恵器の長頸壺(第13図12)や、赤焼土器・須恵器が出土している(第13図)。S E109は径約130cm、深さ85cmの隅丸方形を呈し、内部に井桁状に組まれた井戸枠の残欠が検出されたが、大きさは不明である。⑨層中より第14図17~23の壺形土器、小型壺、赤焼土器、須恵器の壺が出土しており、一部には墨書銘がある。

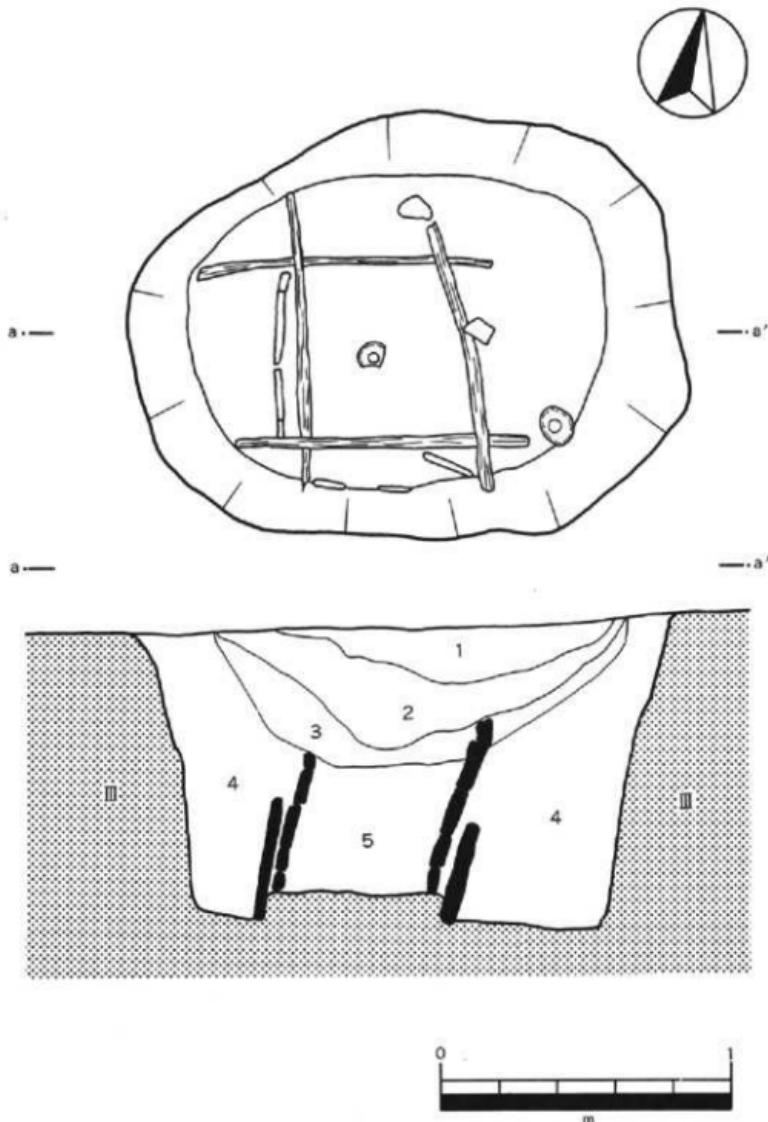
S E159井戸跡(第10図、図版11)

精査区中央部やや北西の133-177グリッド、S B170建物跡の東方8mの地点で確認された井戸跡である。掘り方は、東西190cm、南北145cmの不整な楕円形を呈し、深さ105cmの掘り込みをもつ。内部には遺存状態の良好な井戸枠を井桁状に組み込んでいる。井戸枠は、幅18cm~30cm、長さ96cm~110cm、厚さ3cm~6cmの征目の板材を井桁状に組み入れ、5段となる。組み込まれた大きさは、一辺66cm四方となるが、北東隅は土圧で歪となる。井戸枠の積み方は、下段から上段へ垂直に積み上げているが、土圧により東へ傾むいている。組み込まれている井戸枠組の外側には、幅7cm~24cm、長さ45cm~60cm、厚さ5cmの矢板を2~3枚打ち込んでおり、井戸枠組の補強と、内部に泥砂が入り込まないよう浄化の仕組が施されている。矢板は、打ち込まれる先端部を尖らしている板や、両側を3分の1位削っているもの、板そのものの3種類があり、いずれも先端部の片面を片刃状に削られている。井桁状に組まれた井戸枠材の内側に面する部分に、釘状の工具による文字が描かれており(第17図、図版21)、北辺の井戸枠には積み上げられた順序に南一~南四があり、南辺には同様に北一~北三と描かれている。また西辺には東一~東三、東辺には西一~西三とあり、それぞれの辺に積み上げられた枠材の方針が逆転している。

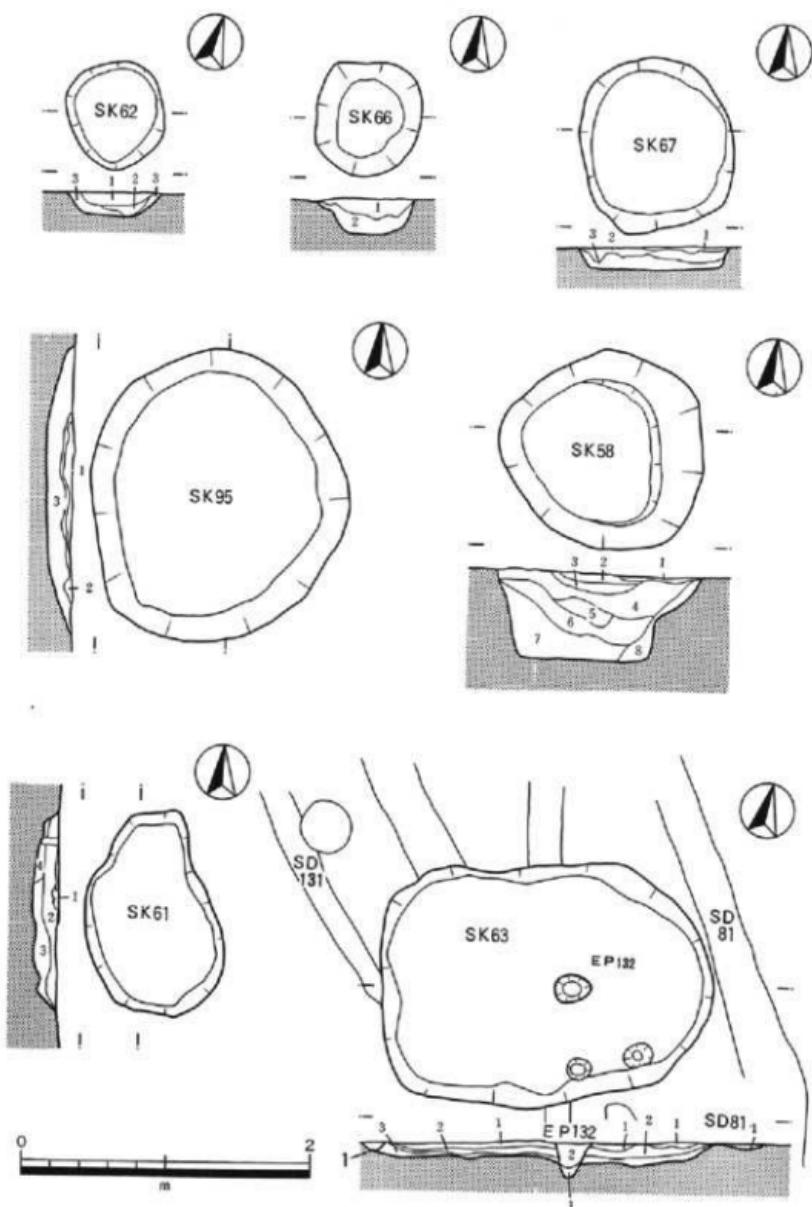
井戸掘り方内の埋土は、4層に分かれ、観察は下記の通りである。

- F 1 青黒色砂質土層(炭化物粒子・土器片をやや多く含む)
- F 2 黒褐色炭化物層(炭化物粒子・土器を多く含み軟かい)
- F 3 濁青灰色粘質土層
- F 4 暗青灰色細砂層

出土遺物は、掘り方内F 4層中より第16図40の赤焼土器や、F 2層の井戸枠組上面中央部より第16図43の赤焼土器が検出された。その他木片や、人頭大の自然石が検出されている。また井戸枠内の覆土はF 5、暗褐色粘質土層の単一層で、有機質物を多量に含んでおり、層下位より須恵器の壺形土器体部に「南方」の墨書銘がある土器(第16図37・38)や「在」などの銘が書かれた須恵器壺底部が検出されている。



第10図 SE 159井戸跡



3 土 壤 (第11図・図版12・13・14)

今次調査で検出された土壌は、27基を数える。平面図は円形・楕円形・不整方形を呈する。断面形は、桶形や船底形を呈する土壌で、底面は一定しない。第13図に掲げた土壌は、比較的類別出来るものを掲げた。平面形は径の小さい円形を呈し、浅いもの(S K 62・66)やや円形で、断面が台形を呈するもの(S K 67), 大形の円形で、断面形が船底を呈するもの(S K 95), 不整の方形を呈し、断面が台形を呈し深いもの(S K 58), 不整楕円形を呈するもの(S K 61), 不整楕円形を呈し、大形で浅いもの(S K 63), に分けた。

S K 62 土壌 (第11図) 134—173 グリッド, S B 210 建物跡と重複して検復して検出された径70cm, 深さ15cmを呈するやや円形の浅い土壌である。覆土は3層に分かれ、1層が土器を多く含む黒色炭化物層, 2層炭化物をやや多く含む灰黑色粘質土, 3層炭化物を少量含む暗青灰色粘質土である。層序は比較的自然堆積を示しているが2層は3層の暗青灰色粘質土中に上層の炭化物が混在したものである。壁面は西側でゆるやかな立ち上がりを示し、底面は凹凸がなくなだらかである。出土遺物は赤焼土器104片、黒色土器3片、陶磁器3片である。時期は平安時代10世紀前半と考えられる。

S K 66 土壌 (第13図) 135—173・174 グリッド, S B 210 建物跡の東方 1 m で確認された径75cm, 深さ25cmを呈するやや円形の土壌である。覆土は2層に分かれ、1層は炭化物・土器をやや多く含む暗灰黑色砂質土層, 2層は炭化物を微量に含む暗青灰色粘質土層である。層序は自然堆積である。壁面は、東側で段をもち、急激な立上りを示す。底面は丸味をもち、なだらかである。出土遺物は赤焼土器48片、黒色土器1片である。時期は平安時代10世紀後半と考えられる。

S K 67 土壌 (第11図・図版13) 137—171 グリッド, S B 200 建物跡南東部で確認された径110cm, 深さ15cmを呈する。平面形はやや円形の断面が台形を呈する土壌である。覆土は3層に分かれ、1層は土器細片を多く含む黒褐色炭化物層, 2層が炭化物を霜降り状に含む青黑色粘質土層, 3層は炭化物を微量に含む暗青灰色粘質土層である。層序は比較的自然堆積を示しており、壁面は急激な立ち上がりを呈し、底面は平坦である。出土遺物は須恵器6片、赤焼土器41片、黒色土器4片である。時期は平安時代10世紀前半と考えられる。

S K 95 土壌 (第11図・図版13) 132-133—174 グリッド, S B 180 建物跡と S B 210 建物跡の中間で確認されたやや大形の円形を呈した土壌である。長径200cm, 短径180cm, 深さ18cmを呈し、覆土は3層に分けられる。1層は炭化物を全体的に多く含む明青黑色粘質土層、2層が炭化物・土器を多量に含む黒褐色有機物層、3層は炭化物を霜降り状に含む暗青灰色粘質土層である。層序は自然堆積を呈するが、3層がやや厚い。壁面はゆるやかな面を示し、底面はやや平坦である。出土遺物は須恵器3片、赤焼土器9片の出土量の少ない土

壙で、時期は明確な決定は出来ない。平安時代10世紀代と思われる。

S K 58 土壙 (第11図) 136・137-174・175 グリッド、S B 210 建物跡の南東部 6 m で確認された長径 143 cm、短径 136 cm、深さ 60 cm を呈する不整の方形を呈した土壙である。覆土は 8 層に分かれ、1 層は青黒色砂質土層、2 層は濁灰黑色粘質土層で灰を多く含む。3 層は灰・炭化物を少量含む濁青灰色粘質土層、4 層は暗青灰色砂質土層、5 層は青灰色シルト層、6 層は炭化物・土器を含む明青黑色粘質土層、7 層は炭化粒子を含む暗青灰色細砂層、8 層が暗青灰色砂層である。断面形が台形を呈し、層序は比較的自然堆積を呈しているが、8 層は壁面が崩壊したものと思われる。底面は平坦である。出土遺物は須恵器 10 片、赤焼土器 39 片の出土がある。本土壙の時期は、平安時代 10 世紀後半と考えられる。

S K 61 土壙 (第11図・図版12) 134・135-173・174 グリッド、S B 210 建物跡と重複して確認された不整梢円形を呈する土壙である。長径 140 cm、短径 90 cm、深さ 18 cm を測る。覆土は 4 層に分かれ、1 層は黒褐色砂質土層で、炭化物・土器を多く含む。2 層は炭化物を霜降り状に含む青黒色粘質土層、3 層が土器細片を多く含む黒色炭化物層、4 層は炭化物を微量に含む暗青灰色粘質土層である。層序は自然堆積を呈し、壁面はやや急激な立ち上がりを呈する。底面は凹凸がある。出土遺物は、須恵器 7 片、赤焼土器 100 片、黒色土器 15 片である。時期は出土土器により、平安時代 10 世紀前半と考えられる。

S K 63 土壙 (第11図・図版13) 136-171 グリッド、S B 190 建物跡南方 2 m で確認された不整梢円形を呈し、大形で浅い土壙である。本土壙は南北に走る S D 131 溝跡を西側で切り合い、断面の観察により、S D 131 溝跡が本土壙を切っていることが判明した。また中央部には E P 132 ピットが切っている。大きさは長径 228 cm、短径 153 cm、深さ 14 cm を測る。覆土は 3 層に分かれ、1 層が炭化物を霜降り状に多く含む暗青黑色砂質土層、2 層が土器を多く含みサラサラしている黒色炭化物層、3 層は炭化物・土器を少量含む暗青灰色粘質土層である。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面は起伏がある。出土遺物は、須恵器 9 片、赤焼土器 34 片、黒色土器 3 片である。時期は平安時代後半 10 世紀前半と考えられる。

4. 溝状遺構 (第4図・図版14)

溝状遺構は今次調査で遺構台帳に登録されたものは 44 条である。ほとんどが南北に走るものであるが、その主軸方向によって大きく 4 つに分かれる。一つは S B 140・180 建物跡の主軸方向と同じ向きを示す溝跡 (A 種) と、S B 190・200 建物跡の主軸方向と同じ向きを示す溝跡 (B 種)、現水田の方向と同じ向きを示す溝跡 (C 種)、これらの溝跡に直交する溝跡 (D 種) の 4 種が認められる。S D 81・80・74 溝跡等は B 種、S D 226 溝跡等は D 種、S D 22・32-34 溝跡等は A 種となり、D 種は B 種の溝跡と直行するものと考えられる。出土遺物により A・B・D 種は平安時代 10 世紀前半から後半、C 種は近世以降と考えられる。

III 遺 物

北田遺跡第2次調査で出土した土器は、整理箱にして約32箱分である。この他に曲物や箸などの木製品、井戸の内部施設に用いられた井戸枠や矢板、古銭などの金属製品などの遺物がある。遺物は精査地区北半から多く出土しており、分布状況は遺構のそれと軌を一にする。本章では遺構内出土の遺物を中心に記述し、包含層出土のものについては大部分を割愛した。

遺構内出土の土器点数は全部で3,058片を数える。内訳は、赤焼土器2,512片、須恵器368片、土師器176片、陶磁器2片で、赤焼土器片が全体の82%を占める。土師器はすべて内面ないし外外面に黒色化処理が施されているもので、井戸跡内からの出土例が多く、逆に建物跡柱穴内からは少ない(表1・2)。

1. 建物跡出土の遺物(第12図、表3、図版15)

6棟の建物跡のうちS B210建物跡を除く5棟の建物跡の柱穴掘り方の埋土から、少量化する土器片が出土している。建物跡からは土器以外の遺物は認められない。

S B140建物跡からはもっとも多く土器が出土している。赤焼土器には壺(第12図4・5・6・7)、小形甕、壺、鍋(同図9)の器種がある。壺は体部下半がやや丸味を持つものの(4・5・6)と体部全体が大きく外反するもの(7)の二つがある。小形甕や鍋は口縁部がほぼ直立するものと、丸く膨みを持つものがある。須恵器には壺・壺(3)・甕の器種がある。壺は1片のみで、底部糸り離しは回転糸切りによるものである。土師器はほとんどが内面に黒色化処理が施されている壺ないし高台付壺である。これらの時期は、平安時代10世紀中葉から後半頃に推定される。

S B180建物跡出土の土器は少ない。赤焼土器には壺・甕の器種がある。壺は体部下半がやや丸味を持つものである。須恵器は壺と壺の口縁部(2)が各1片ある。壺は底部の切り離しがヘラ切りによるものである。土師器は認められない。これらの時期は、平安時代9世紀末葉のものから10世紀後半のものまでかなりの幅が推定される。

S B170建物跡出土の土器は、赤焼土器と須恵器合せて7片のみである。須恵器は器種が壺のみ4点で、うち底部の切り離しがヘラ切りによるもの1点と回転糸切りによるもの2点がある。赤焼土器は小形甕・甕の器種がある。時期は平安時代10世紀前半頃にあたる。

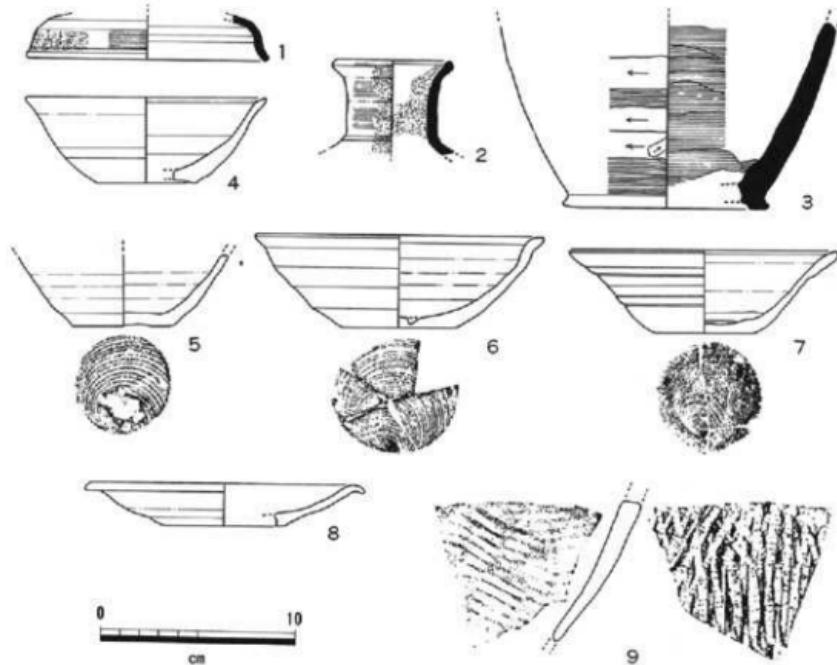
S B190建物跡からは土器がやまとまって出土している。赤焼土器は壺(8)・甕・鍋の器種がある。壺には体部下半がやや丸味を持つものと体部全体が大きく外反し器高が

表1 造構内出土土器点数表(1)

種別 造構	赤燒 土器	須惠器	土師器		陶器 磁器	計
			内面黒化	外面黒化		
S X 21	38	1	10			49
S D 22	1	2				3
S K 23	7	2				9
E P 24		1				1
S D 25	1					1
E P 27	10					10
S X 28	1	3				4
S X 29	2	1				3
S X 30	4					4
E P 31	1					1
S D 32	3	1				4
S D 33	2	1				3
E P 35	2	1				3
E P 36	4		1			5
S D 37	18	5				23
S D 38	2					2
S D 39	3					3
S D 40	3	1				4
S D 41	7		2			9
E P 42	1	1				2
S D 43	5		1			6
S D 44	3					3
S D 45	8					8
S D 46	1	5				6
S D 47	4	4				8
S D 48	46	11				57
S D 49	10	1				11
S D 50	1	1				2
S K 51		2				2
S D 52	15	5				20
S X 53	21	7	12			40
S D 54	3					3
E P 55	1	2				3
S D 56	9		1			10
S K 57	11	3				14
S K 58	39	10				49
S K 59	13	2				15
S K 60	54	15	1			70
S K 61	100	7	15			122
S K 62	104	3	3			110
S K 63						
S K 65						
S K 66						
S K 67						
S K 68						
S K 69						
S K 70						
S K 71						
S K 73						
S K 74						
S D 75						
S D 76						
S D 77						
E P 78						
E P 79						
S D 80						
S D 81						
S P 82						
E P 83						
E P 85						
E P 86						
E P 87						
E P 88						
E P 89						
E P 90						
E P 91						
E P 92						
E P 93						
E P 94						
S K 95						
S K 96						
S D 97						
S D 98						
E P 99						
E P 100						
S D 101						
E P 102						
E P 103						
S D 104						

表2 遺構内出土遺物点数表(2)

種別 遺構	赤燒 土器	須恵器	土師器		陶器 粗器	計	
			内 黒色化	外 黒色化			
S 140	E B112	19	1	2		22	
	E B113	53	1	1	1	56	
	E B115	19		1		20	
	E B119			1		1	
	E B120	72	2	3	2	79	
	E B121	1				1	
	E B122	2				2	
	E B124	35			1	36	
	E B130	5				5	
B 180	E B133	1				1	
	E B138	4	1	8		5	
	E B142	1				1	
	小計	212	5	8	3	1	
	E B148	2				2	
	E B158	16	1			17	
	E B174					1	
S 170	E B178	1				1	
	小計	19	2			21	
	E B163	3	4			7	
	E B183	17				17	
	E B185	10	2			12	
B 190	E B186	4	3			7	
	E B187	10				10	
	E B192	27	16			43	
	E B193	32	6	1		39	
	E B194	2				2	
	小計	105	31	1		137	
	E B72	7	1			8	
S 200	E B195	3	1			4	
	E B196	2				2	
	E B199	7	1			8	
	E B201	7				7	
	小計	26	3			29	
S E107		87	22	8		117	
S E109		257	31	28		316	
S E159		353	41	39	2	435	
計		2512	368	163	13	2	3058
(%)		82.15	12.03	5.3	0.425	0.66	



第12図 建物跡出土遺物

表3 建物跡出土遺物観察表

器種	辨別番号	計測値(%)				色調	胎土	焼成	底部切り離し技法	調整技法	出土地点・層位
		口径	胴径	底径	器高						
須恵器	蓋	1 (126)				灰色	良	良		体部自然輪	E B192
	壺	2 (62)				灰色	良	良		頭部自然輪	E B174
	壺		(100)			灰色	良	良	?	削り・ハケ目	E P125
赤焼土器	壺	4 (124)	(50) (45)			明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		E B115
	壺	5		52		明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		E B113
	壺	6 148		60	47	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		E B113
	壺	7 (138)		(42)		明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		E B124
	壺	8 (144)	(62)			明褐色	良	良	?		E B192
	壺	9				明褐色	良	良		格子目状叩き	E B122

低いもの(8)とがある。須恵器は壺・高台付壺・蓋(1)・壺・甕の器種がある。壺と高台付壺の底部切り離しはすべて回転糸切り技法による。土師器は内面黒色化処理された壺が1点みられる。時期は9世紀前半から10世紀後半であるが新しいものが主である。

S B 200建物跡出土の土器は、赤焼土器と須恵器合せて14片ある。赤焼土器は壺・甕・鍋の器種がある。壺の体部下半はやや丸味をもつ。須恵器は壺・甕の器種があり、壺の1つに底部切り離しが回転糸切りのものがある。時期は10世紀中葉頃にあたる。

2. 井戸跡出土の遺物

北田遺跡の今次の調査では、精査地区北寄りから井戸跡が3基検出されている。このうちS E107井戸跡とS E109井戸跡については、井戸癪絶後の遺物捨て場的な土壌2基もからんだ複雑な構造の重複がみられ、土層断面の観察からS E107井戸跡→S E109井戸跡→S E107a 土壌→S E109b 土壌という新旧関係が認められた。本節では井戸跡上面の土壌の遺物も各井戸跡出土遺物に一括して記述する。

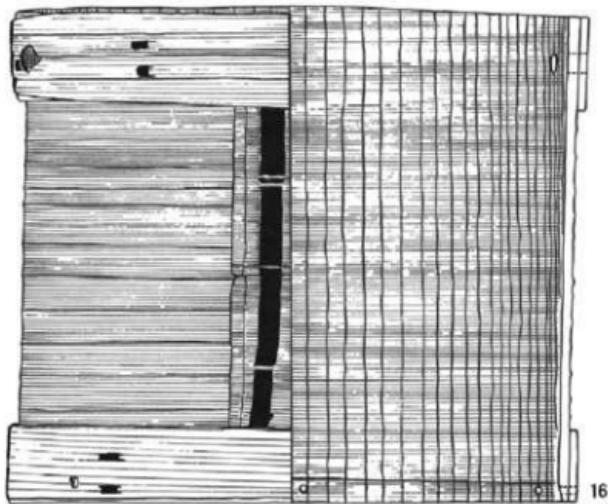
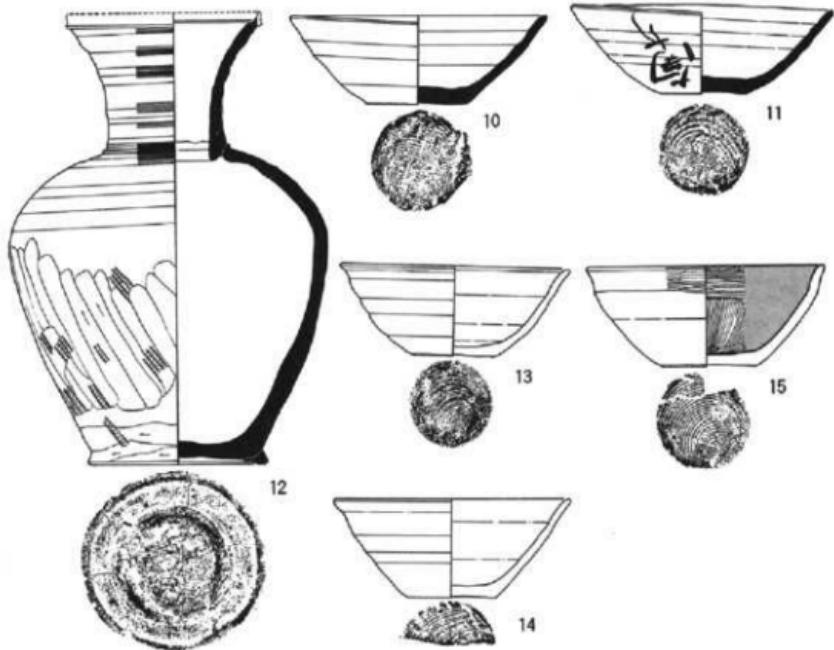
S K107井戸跡(第13図、表4、図版16) 本井戸跡の埋土は、上層の土壌覆土も含めて8層に分けられる。うち埋土1~6層がS E107a 土壌に伴うもので、7・8層が本来のS E107井戸跡に伴うものである。

各層に遺物を少量ずつ含むが、とくに3層から土器が5個体分まとまって出土している(第13図10・11・13~15)。10・11が須恵器、13・14が赤焼土器、15が土師器である。器種はすべて壺で、底部の切り離しがいずれも回転糸切り手法による。15は内面全体および外面部口縁の一部がヘラミガキのうち黒色化処理されている。11の体部外面には「南方」という墨書きがみられる。なお同じ「南方」の墨書き土器は、S E159井戸跡底面からも2個出土している。埋土3層の土器群と同じような土器の組み合せは、遊佐町地正面遺跡S E 3井戸跡でも認められているが、両者の土器群を比較した場合、本土器群のものが形態などでやや後出的な様相を示す。地正面遺跡S E 3井戸跡の時期は平安時代10世紀前半頃と考えているので、本土器群の時期は10世紀中葉頃と推定しておきたい。

S E107井戸跡の底面からは、木製桶(16)と須恵器長頸壺(12)がほぼ重なった状態で出土している。16は曲物作りの桶の底を抜いて井筒として埋め込まれたものである。17は1個のみ単独に出土したもので、所謂「井戸眼」¹²としての役務をもつものかもしれない。12の長頸壺の時期は、口縁端や肩部の張り具合などから9世紀末葉から10世紀初め頃と思われる。

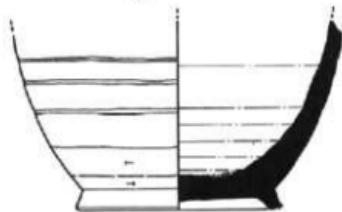
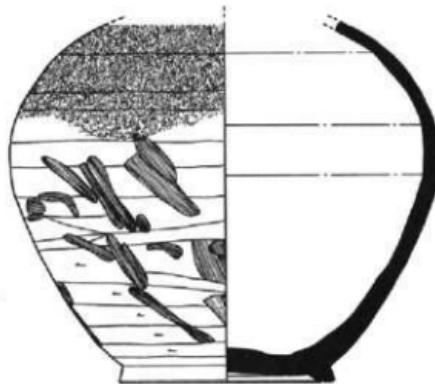
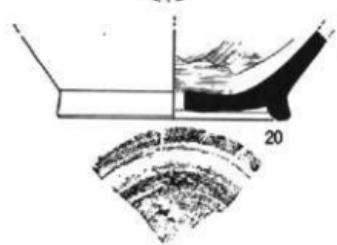
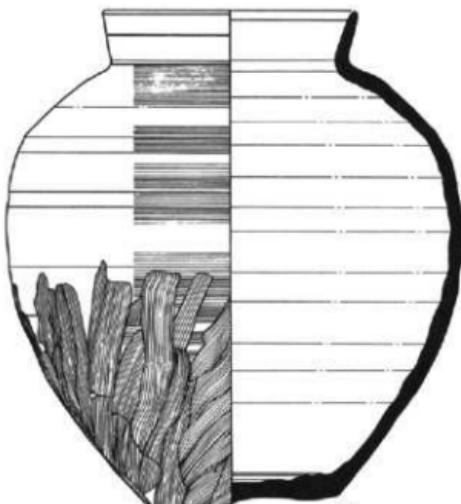
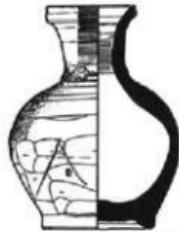
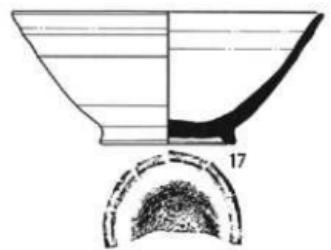
S E109井戸跡(第14・15図、表5、図版17・18) 本井戸跡の埋土は、上層の土壌覆土も含めて9層に分けられる。うち埋土①~⑥層がS E109b 土壌に伴うもので、⑦~⑨層が本来のS E109井戸跡に伴うものである。埋土②、⑥層を除く各層に遺物を少量ずつ含むが、とくに⑦層と最下層の⑨層から多く出土する。

最下層からは6個体分の土器が出土している(第14図19・21~23、第15図24・27)。19が小形の須恵器長頸瓶、22・23が大形の須恵器短頸壺、24・27が赤焼土器壺である。27の体部外面には「京一」の墨書きがみられる。ほとんどの土器の底部切り離しは回転糸切り手法によるが、22だけは底部に削り調整が施されているため不明である。最下層の土器群の時期は、短頸壺の口縁部が外反することなどから平安時代10世紀前半頃と推定される。

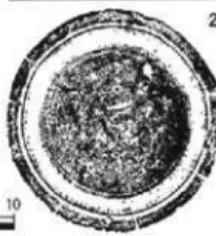


0 10
cm

第13図 SE 107井戸跡出土遺物



0 10
cm



第14図 SE109井戸跡出土遺物(1)

表4 SE107井戸跡出土遺物観察表

器種	鉢内番号	計測値(%)				色調	胎土	焼成	底部切り離し技術	調整技法備考	出土地点・層位
		口径	胴径	底径	高さ						
須恵器	壺	10	133		51	46	明褐色	良	良	回転糸切り	
		11	134		46	46	灰褐色	良	良	回転糸切り	SE107-F3
赤土燒器	壺	12	(100)	165	90	228	暗灰色	石英粉混	良	?	外面部ケズリ
		13	(117)		44	46	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	SE107-F3
黒色土器	壺	14	(120)	(47)	51	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SE107-F
		15	(120)		50	52	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面部黑色化
本製品	桶	16	298	285	295	254	杉の栓目板を使用				SE107-底

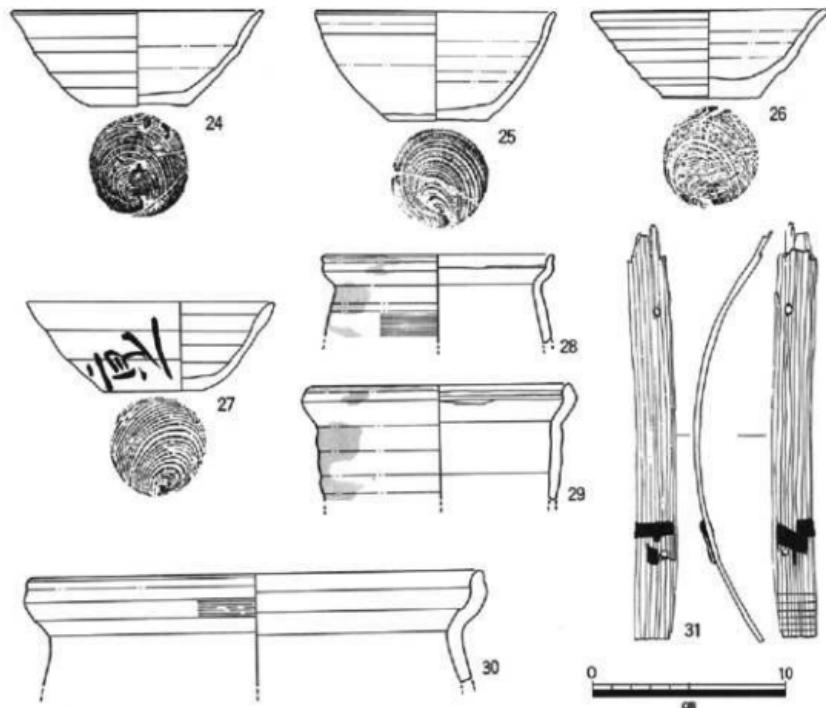
表5 SE109井戸跡出土遺物観察表

器種	鉢内番号	計測値(%)				色調	胎土	焼成	底部切り離し技術	調整技法備考	出土地点・層位
		口径	胴径	底径	高さ						
須恵器	高台壺	17	(161)		68	67	灰褐色	良	良	回転糸切り	
	蓋	18	(145)				灰褐色	良	?		SE109-F
須恵器	壺	19	46	88	57	115	暗灰色	粗砂混	良	回転糸切り	「ハ」諺形文字
		20		(118)			灰褐色	粗砂混	良	?	SE109-底
須恵器	壺	21		(102)			灰褐色	粗砂混	良	?	外面部削り
		22	129	236	96	257	灰褐色	良	良	?	SE109-F
赤焼土器	壺	23		(223)	108		灰褐色	粗砂混	良	ナゲ調整	外面部削り
		24	(128)		52	49	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	
赤焼土器	壺	25	(222)		51	56	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	SE109-F
		26	123		50	45.6	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	SE109
赤焼土器	壺	27	128		52	47	明褐色	良	良	回転糸切り	外面部墨書き
		28	(118)				赤褐色	粗砂混	良	外面部1部スス	SE109-F
赤焼土器	壺	29	(134)				明褐色	粗砂混	良	外面部1部スス	SE109-F
		30	(232)				明褐色	粗砂混	良		SE109-F
本製品	曲物	31	残長162幅20厚さ1.5				径3%の穿孔2ヶ所				SE109-F
漆器	椀	105	厚さ3.5				内外黒色漆				SE109-F
井戸縁残片		32	径長54.4幅17.2厚さ2.5				ノコ刷				SE109-F
矢板残片		33	径長48.7幅9.5厚さ1.0~1.2								SE109-F

なお第15図10の曲物片も本井戸跡最下層中からの出土である。

埋土6層出土の土器は小片が多いが、図上復元ができたものに、須恵器蓋（第14図18）、壺（同20）、赤焼土器壺（第15図25）がある。18の蓋などは9世紀代にも遡り得るが、本層の土器群の時期は全体的に不明な点が多い。

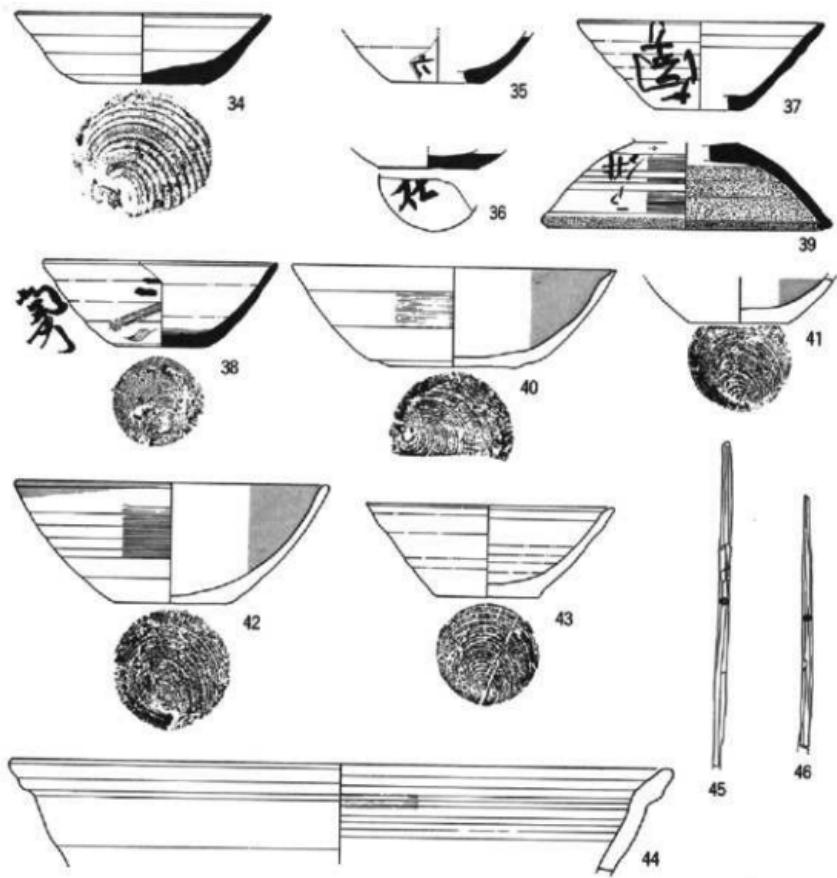
埋土3~5層出土の土器には、須恵器高台付壺（第14図17）、赤焼土器壺（第15図26）、同小形壺（同図28・29）、同壺（30）、内黒土師壺などがある。本土器群はSE109-b土壇に伴うものであるが、その時期は赤焼土器小形壺や壺の口縁部が丸く膨らむことなどから平安時代10世紀後半頃と推定される。



第15図 SE109井戸跡出土遺物(2)

表6 SE159井戸跡出土遺物観察表

器種	種類	計測値(%)				色調	胎土	焼成	底部切り離し技術	調整技法備考	出土地点・層位
		番号	口径	脚径	底径	高さ					
埴輪	环	34 (132)		62	36	白灰色	良	不良	同軸系切り		SE159・F3
		35		(48)		明褐色	良	酸化焼成	同軸系切り	外面墨書き六字+	SE159・
		36		(52)	44	白灰色	良	良	同軸系切り	底部墨書き+	SE159・底
		37 (125)		(44)	44	白褐色	良	良		外面墨書き「南方」	SE159・底
		38 (121)		47		明褐色	良	良	同軸系切り	外面墨書き「南方」	SE159・底
黒色土器	蓋	39 (175)			(51)	灰白色	良	良	同軸系切り	外面墨書き	SE159・F3
	环	40 (166)		64		明褐色	良	良	同軸系切り		SE159・2
		41		52	62	明褐色	良	良	同軸系切り	内面黑色化	SE159・3
		42 (164)		62	(47)	茶褐色	良	良	同軸系切り	内面黑色化	SE159・4
漆器	环	43 (128)		54		明褐色	良	良	同軸系切り		SE159・5
	甕	44 (344)				明褐色	良	良			SE159・1
木製品	箸	45	短長166	径5		四面を削る。杉か。失損品。					SE159・F5
		46	短長128	径5		五面を削る。杉か。失損品。					SE159・F5
種子	桃	106	長19~23	厚さ10.8~15		外面明茶褐色。					SE159・F3

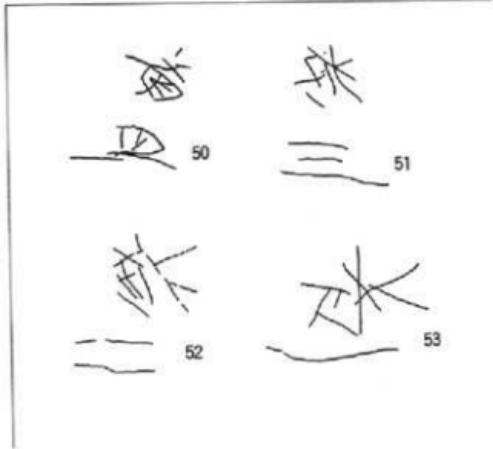
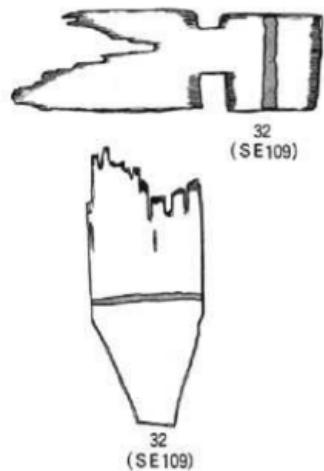
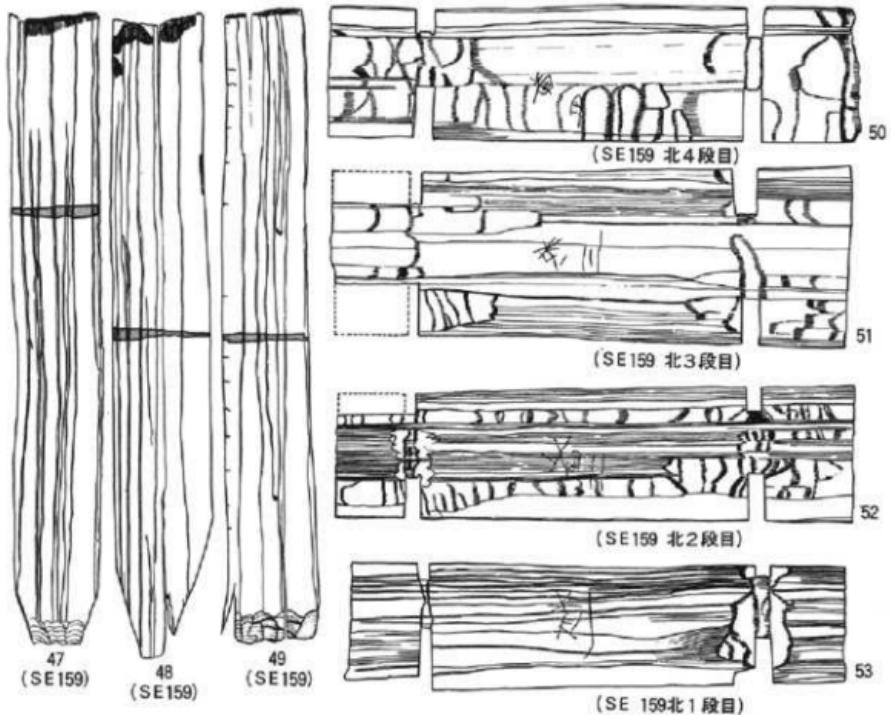


第16図 SE159井戸跡出土遺物

0 10
cm

SE159井戸跡(第16図、表6、図版19) 本井戸跡の埋土は、井戸掘り方の部分を含めて5層に分けられる。遺物は埋土の各層から出土するが、とくに井戸枠内埋土5層の最下部に土器が4個体分(第16図36・37・38・42)と木製箸が2本(同45・46)出土している。36~38が須恵器環、42が内面に黒色化処理のある土師器環である。37・38の体部外面には「南方」の墨書銘、36の底部には「在カ」の墨書銘がみられる。最下層の土器群の時期はSE107a土壤埋土3層と共通することから、10世紀中葉頃と考えられる。

この他埋土1層(第16図44)、2層(43)、3層(34・39)、4層(40)からも土器が出土している。土器の器形や調整手法などは、最下層の土器群とほぼ共通しており、時期は10世紀中葉頃と推定される。



第17図 SE159・109井戸跡出土井戸枠・矢板

表7 SE159・109井戸跡出土井戸枠観察表

種別	井戸内 番号	井戸内の 位置	段数	計測値 (%)				文 字	備 考
				長	幅	厚	内付		
枠		東枠	1	895	215	25	56	西一	鉛、手斧、ノコ痕
		東枠	2	925	200	30	558~565	西二	鉛、手斧、ノコ痕
		東枠	3	910	230	30	575~585	西三	鉛、手斧、ノコ痕
		東枠	4	950	237	25	590~595	西四	鉛、手斧、ノコ痕
		東枠	5	900	175	30	580		
矢板		北		1,130	220	25			鉛、手斧痕
		中		1,110	155	25			一部腐化
		南		1,125	150	25			
枠		西枠	1	890	195	30	560	東一	鉛、手斧、ノコ痕
		西枠	2	900	190	33	560~570	東二	鉛、手斧、ノコ痕
		西枠	3	895	220	30	582~585	東三	鉛、手斧、ノコ痕
		西枠	4	945	290	30	585		
矢板		北		1,193	180~190	20			鉛、手斧痕
		中		1,095	174	20			鉛、手斧痕
		南		1,105	185~200	20			鉛、手斧痕
枠		南枠	1	890	195	33	565	北一	鉛、手斧、ノコ痕
		南枠	2	890	250	30	566~575	北二	鉛、手斧、ノコ痕
		南枠	3	828	275	25	585	北三	鉛、手斧、ノコ痕
		南枠	4	905	240	28	550~560		
矢板		東西		1,070	160	20			旋曲、鉛、手斧痕
		東西		1,070	165	23			旋曲、鉛、手斧痕
枠	53	北枠	1	857	218	28	558~562	南一	鉛、手斧、ノコ痕
	52	北枠	2	903	234	30	565~570	南二	鉛、手斧、ノコ痕
	51	北枠	3	904	305	25	540~560	南三	鉛、手斧、ノコ痕
	50	北枠	4	924	233	28	535~540	南四	鉛、手斧、ノコ痕
矢板	49	東		1,083	155	16			鉛、手斧痕
	48	中		1,095	168	23			鉛、手斧痕
	47	西		1,081	153	20			鉛、手斧痕

※ 枠の段数は下路より1、2…段とした。

SE159井戸跡の井桁状に組まれた井戸枠には、各々井戸枠記号とでも称すべき文字が刻まれている(第17図、表7、図版20・21)。井戸横枠の内面中央に鑿又は釘状の工具を用いて線刻したもので、四方位と漢数字の組み合せによる二文字を横位に描いている。井戸文字は腐蝕の著しい最上端の井戸枠3枚を除くすべてに認められ、井戸枠組立の際の順序を示したものと思われる。

井戸枠の検出状況と井戸文字を比較した場合に、二文字の内の漢数字「一~四」は下段からの組立順序と合致するが、四方位「東・西・南・北」は実際の方位と逆になっている。これは四方位を内側向きに対して表示したと解釈した場合により合理的に説明がつく。

3. 土壌出土の遺物（第18図、表8、図版22）

今次調査で検出された土壌27基のうち、量の寡多を別にすればほとんどの土壌の覆土から遺物が出土している（表1・2）。このうちとくに遺物の出土が多かったのは、SK58・60・61・62・63・66・67土壌である。つぎに主な土壌の遺物と推定時期について述べる。

SK51土壌覆土からは須恵器壺（第18図55）と同長頸壺口縁が出土している。時期は平安時代10世紀前半頃である。SK58土壌F1・4・6からは須恵器壺（63）・甕（58）、赤焼土器壺・甕などが出土している。時期は10世紀後半頃である。

SK60土壌覆土からは須恵器壺・高台付壺（56）・壺・赤焼土器壺・甕（65）、土師器壺などが出土している。時期は10世紀代である。SK61土壌F1・2からは須恵器甕・赤焼土器壺・甕、土師器壺などが出土している。時期は10世紀前半頃である。SK62土壌F1からは須恵器壺（57）、赤焼土器壺（62）・甕・土師器壺などが出土している。時期は10世紀前半頃である。SK63土壌F1からは須恵器壺・赤焼土器壺・甕・土師器壺などが出土している。時期は10世紀前半頃である。

SK66土壌F1からは赤焼土器壺、土師器壺などが出土している。時期は10世紀後半頃である。SK67土壌F1からは須恵器壺・蓋、赤焼土器壺・壠（68）などが出土している。時期は10世紀前半頃である。SK69土壌覆土からは須恵器壺69、赤焼土器甕・壠・土師器甕などが出土している。時期は9世紀後半頃である。

SK95土壌F2からは須恵器壺、赤焼土器壺などが出土している。時期は10世紀代である。SK96土壌覆土からは須恵器壺（54）、赤焼土器壺、土師器壺などが出土している。時期は10世紀後半頃である。SK213土壌F1からは須恵器壺、赤焼土器壺などが出土している。時期は9世紀後半頃である。

このほかSX21（59・60）、SX53（61・64・67）とした性格不明の落ち込みの覆土がらも遺物が出土している。時期はSX21・53とも10世紀中葉頃に推定される。

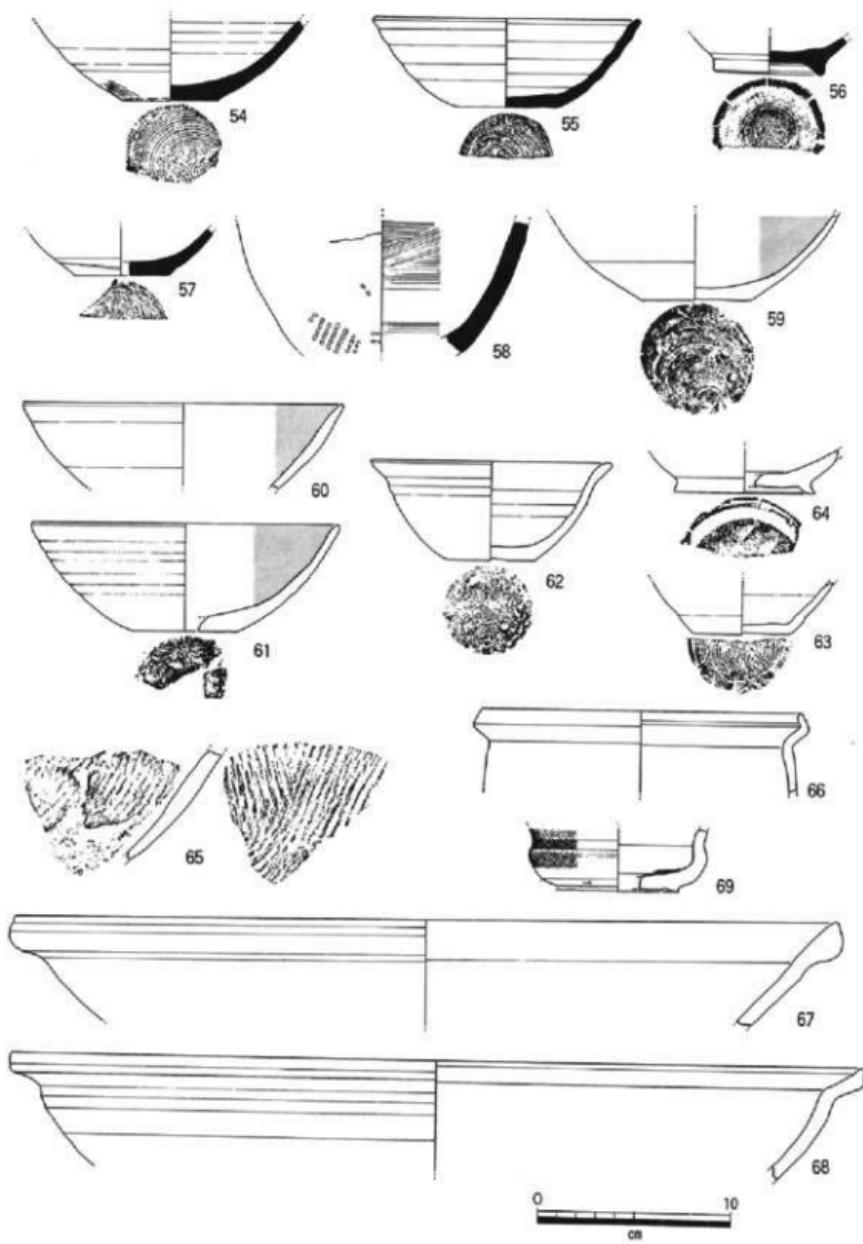
4. 溝状遺構出土の遺物（第19図、表9、図版23）

溝状遺構は遺構台帳に登録したものだけで44条あるが、うち36条の覆土から遺物が出土している。本節ではこのうち遺物が比較的多く出土したSD84・116・131溝について触れる。

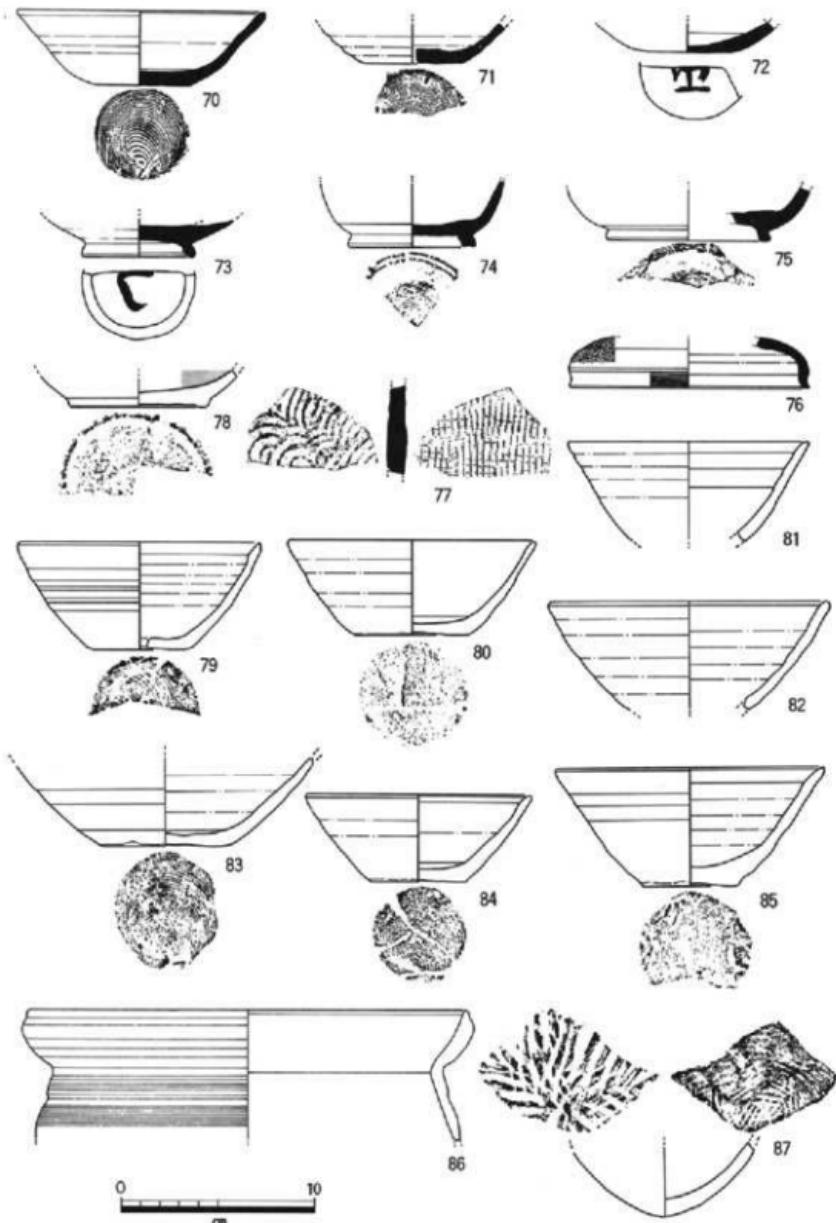
SD84溝跡からは、須恵器高台付壺（第19図75）・甕（77）、赤焼土器壺（81～83）・甕（86）などが出土している。時期は10世紀後半頃に推定される。

SD116溝跡からは、須恵器壺（71）・高台付壺（74）、赤焼土器壺（84）などが出土している。時期は10世紀前半頃に推定される。

SD131溝跡からは、須恵器壺（72）、赤焼土器壺（79・85）・甕（87）などが出土している。時期は10世紀前半頃に推定される。



第18図 土壌出土遺物



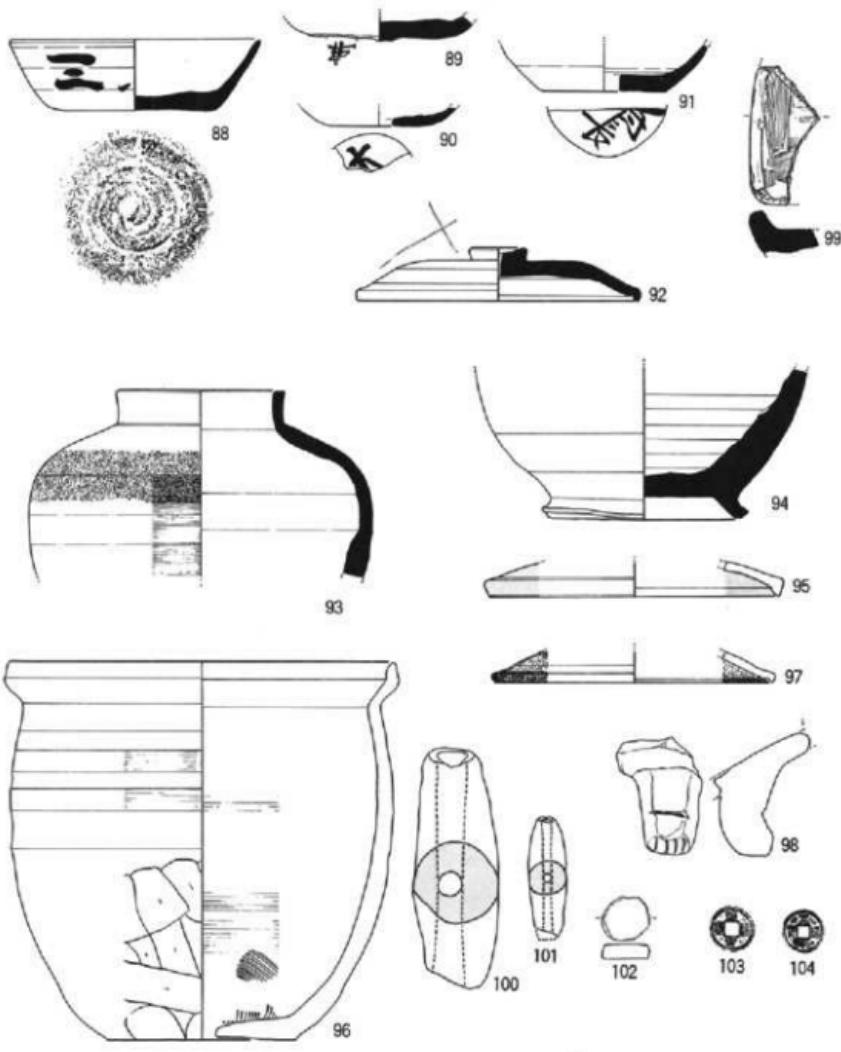
第19図 溝状造構出土遺物

表8 土壤出土遺物観察表

器種		測定値 (%)				色調	胎土	焼成	底部切り離し技法	調査技法備考	出土地点・層位
番号	Ⅰ径	Ⅱ径	Ⅲ径	Ⅳ高							
須恵器	环	54		(50)		白灰色	粗砂混	良	回転糸切り		S K96 · F
		55	(136)	(51)	44.5	明灰色	良	良	回転糸切り		S K51
	高台环	56		(57)		灰 色	小礫混	良	回転糸切り		S K60 · F
	环	57		(50)		灰 色	良	良	回転糸切り		S K62 · F
黒色土器	蓋	58				灰 色	良	良			S K58 · F 6
	环	59		(58)	44	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面黑色化	S X21 · F 1
		60	(163)			灰褐色	粗砂混	良		内面黑色化	S X21
		61	(157)	(56)	56	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面黑色化	S X53 · F
赤燒土器	环	62	(121)	47	51	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		S K62 · F
		63		(52)		明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		S K58 · F 4
	高台环	64		(69)		明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		S X53 · F
	甕	65				赤褐色	粗砂混	良		外面スヌ付着	S K60 · F
		66	(164)			明褐色	粗砂混	良			S K62 · F
		67	(426)			明褐色	粗砂混	良			S X53 · F
		68	(440)			明褐色	粗砂混	良			S K67
陶器	甕	69		(62)		明灰褐色	良	良		内外面に釉	S K69 · F

表9 溝状遺構出土遺物観察表

器種		測定値 (%)				色調	胎土	焼成	底部切り離し技法	調査技法備考	出土地点・層位
番号	Ⅰ径	Ⅱ径	Ⅲ径	Ⅳ高							
須恵器	环	70	(129)		50	38	灰 色	良	良	回転糸切り	S D46
		71		(52)		灰 色	良	良	回転糸切り		S D116 · F 1
		72		(44)		灰 色	良	良	回転糸切り	底部墨書き	S D131 · F
	高台环	73		(58)		灰 色	良	良	回転糸切り	底部墨書き	S D37
甕	74		(62)			灰 色	良	良	ヘラ切り		S D116 · F 1
	75		(83)			灰 色	良	良	?		S D84 · F
	76	(125)				灰 黑色	良	良		上面に自然釉	S D127 · F
	77					灰 黑色	良	良		外面青濁液波	S D84 · F
黒色土器	环	78		71		明褐色	良	良		内面黑色化	S D65 · F
赤燒土器	环	79	(125)	(54) (54.5)	明褐色	良	良				S D131 · F
		80	(128)	58	(48)	明褐色	良	良	回転糸切り		S D75 · F
		81	(126)			明褐色	良	良			S D84 · F
		82	146			茶 色	良	良			S D84 · F
		83		(64)		赤褐色	良	良	回転糸切り		S D84 · F
		84	(116)	48	(44)	明褐色	良	良	回転糸切り		S D116 · F 1
		85	(140)	(52) (60)	赤褐色	良	良	回転糸切り			S D131 · F
	甕	86	(228)			明褐色	良	良		外面カキメ	S D84 · F
		87				茶 色	良	良		底部片	S D131 · F



第20図 包含層出土遺物

表10 包含層出土遺物観察表

器種	器番号	計測値(%)			色調	胎土	焼成	底部切り離し技術	調整技法参考	出土地点・層位
		口径	胴径	底径						
須恵器	环	88	128	75	37	白灰色	粗砂混	良	ヘラ切り	外面墨書き 試掘場No.37・Ⅲ
		89		(73)		灰色	粗砂混	良	ヘラ切り	底部墨書き 131-178・Ⅱ
		90		(52)		灰色	良	良	回転糸切り	底部墨書き 137-187・Ⅱ
	91		(64)		灰色	良	良	ヘラ切り	底部墨書き 136-168・Ⅱ	
器蓋	92	(144)			27	灰色	粗砂混	良	外面墨書き「十」	試掘場
	93		(178)	(84)		灰色	良	良	外表面自然釉	129-180・Ⅱ
	94			97		灰色	粗砂混	良	回転糸切り	1部気泡あり 129-180・Ⅱ
土師器	蓋	95	(150)			黒褐色	良	良		内外面黒色化 133-191・Ⅱ
赤燒土器	甕	96	(197)	(198)	(98)	195	明褐色	粗砂混	良	試掘場No.123・Ⅲ
陶器	蓋	97	(144)			白灰色	粗砂混	良		体部自然釉 136-187・Ⅱ
赤燒土器	壺?	98				明褐色	粗砂混	良		137-170・Ⅱ
須恵器	硯	99	芯厚11			灰色	粗砂混	良	削り・ヘラ磨き	134-190・Ⅱ
土器	土鍤	100	長124	径44	口径15.5	明褐色	粗砂混	良		135-183・Ⅱ
		101	長62	径20	口径5	明褐色	粗砂混	良		試掘場No.36・Ⅲ
石製品	円盤状石製品	102	径25	厚さ8		前面、側面を磨る				137-176・Ⅱ
金銅製品	古銭	103	径20.4-5	厚さ1.2		「皇宋通宝」				試掘場No.40・Ⅲ
		104	径23	厚さ0.9		「寛永通宝」				試掘場No.69・Ⅲ
漆器		107	厚さ3			内面漆添。外表面樹色漆。				133-176・Ⅱ

5. 包含層出土の遺物 (第20図、表10、図版24)

包含層出土の遺物についても触れるべき資料が多い。紙面の都合から大部分は割愛せざるを得ないが、とくに注目すべき遺物について若干記述を行なう。

第20図88-91は、包含層第Ⅱ層出土の墨書き土器である。器種はすべて須恵器環で、底部の切り離しは、88・89・91がヘラ切り、90が回転糸切り手法による。92は天井部外面にヘラ記号のある須恵器蓋である。

93・94は須恵器短頭甕の一部と思われるもので、SE109井戸跡最下層の短頭甕にさらに類例を加えたことになる。95は内外面に黒色化処理が施されている土師器蓋、97は白灰色の素に淡緑色の釉を施した灰釉陶器蓋、96は復元中途であるが坪掘り区からほぼ完形で出土した赤燒土器甕である。98は赤燒土器甕ないし壺の脚部と思われるもので、末端に4つの刻み目が入っている。煮沸形態としての赤燒土器甕や壺の用途を知る上で好例である。

土製品としては風字硯(99)や土鍤(100・101)などがある。99は風字硯(須恵器質)の一部であるが、欠損が著しく脚部の形態は明らかでない。

102は円盤状の石製品で、平たい凝灰岩の側辺部が研磨によって面取りされている。このほか「皇宋通宝」や「寛永通宝」などの古銭(103・104)も2点のみであるが出土している。

6. 墨書き土器（表11）

墨書き土器は、SE 107・109・159井戸跡、SD 37・131溝状遺構、包含層から出土している。判読可能なもの8点、判読不能なもの5点の総計13点である。特にSE 159井戸跡からは5点出土している。

器種別に見ると、須恵器が11点と大部分をしめており、他に赤焼土器が2点ある。环が11点、蓋・高台付环が各1点ある。

墨書き部位は、体部外面7点、底部6点である。体部外面のものには、縦書きと横書きがある。縦書きの場合口縁を上にして書かれたもの（35・38・88）と、底部を上にして書かれたもの（11・16・39）がある。横書きの場合は口縁を右にして書いたもの（27）の1点がある。同様の文字が書かれている11・37・38で、縦書きでも正位と倒立したものがあり、書き方に特別きまりは無いようである。

文字の種類は半読可能なもので見るに、「南方」が3点、他に「京一」、「在」、「」、「三」が各一点ずつある。

今回調査した地区の道路を隔てた東側に、55年に調査した北田・関B遺跡がある。両遺跡からも墨書き土器が出土している。墨書き銘は「靈長」、「專」、「上」、「田」、「万」、「安」などがある。関B遺跡の井戸跡から「靈長」という文字の墨書き土器が出たが、今次の北田遺跡のSE 107・109井戸跡からは「南方」という文字のものが出土している。「靈長」には雨乞いという意味が察せられるが、「南方」については未詳である。

表11 墨書き土器観察表

器種	鉢図・鉢図番号	底部切り離し技法	墨書き位置	墨書き銘	出土地点・層位
須恵器	第13図・11	回転糸切り	体部外面・倒立	〔南方々〕 脊痕不明瞭	SE 107・F 3
	第15図・27	回転糸切り	体部外面・横位	〔京一々〕	SD 109・底
	第16図・35	回転糸切り	体部外面・正位	〔六々〕	SE 159
	第16図・36	回転糸切り	底部外面・	〔在々〕	SE 159
	第16図・37	？	体部外面・倒立	〔南方々〕	SE 159・底
	第16図・38	回転糸切り	体部外面・正位	〔南方々〕	SE 159・底
赤焼土器	蓋	第16図・39	回転糸切り	体部外面・倒立	□□()々
	环	第19図・72	回転糸切り	底部外面	□判読不能
	高台环	第19図・73	回転糸切り	底部外面	々
	須恵器	第20図・88	ヘラ切り	体部外面・正位	三
		第20図・89	ヘラ切り	底部外面	□判読不能
		第20図・90	回転糸切り	底部外面	□□判読不能
		第20図・91	ヘラ切り	底部外面	□ 長
					試掘標No37・■
					131-178・II
					137-187・II
					136-168・II

IV ま と め

1. 遺跡の時期と性格について

昭和55年度に実施された閑B遺跡と北田遺跡1次発掘調査では、各地区の遺構が隣接していることや遺物の検討などから、両遺跡が一連の集落跡であることが推定された。北田遺跡の今回の調査でも建物跡や井戸跡が集中して検出された場所は、昭和55年度精査地区の幹線道路をはさんですぐ西側にあたり、これらが一連の集落跡であることを再確認したことになる。

今次の調査で検出された遺構には、建物跡6棟と井戸跡3基・土壙27基・溝状遺構などがある。建物跡は、検出地域からみて精査地区北西隅の3棟と同北東隅の3棟の2群に分けることができる。また出土遺物の検討結果から、時期的には2つの時期に大別できる。第Ⅰ期（平安時代10世紀中葉）の建物には、SB140・SB200掘立柱建物跡、SB170倉庫跡、第Ⅱ期（平安時代10世紀後半）の建物には、SB180・SB190掘立柱建物跡がある。SB210倉庫跡柱穴内からは遺物はまったく認められていないが、建物主軸方位からはSB190掘立柱建物跡に近い時期が推測される。

第1期にあたるSB140・200掘立柱建物跡は、梁行2間×桁行5間程度の南北棟で、各建物跡の組み合せの内で母屋的な位置を占める。北西隅建物跡群は、当初SB140建物跡とSB170倉庫跡があって、やや遅れてSB140建物跡を追加構築したSB180建物跡が建てられたことになる。北東隅建物跡群は、当初SB200建物跡があって、次にSB190建物跡に代替えられ、これとSB210倉庫跡が伴う可能性が強いことになる。

井戸跡3基のうち各井戸の作られた時期は、SE107井戸跡が9世紀末葉から10世紀初め、SE109井戸跡が10世紀前半、SE159井戸跡が10世紀中葉頃となる。ただし井戸の発絶時期は、SE107井戸跡は10世紀中葉、SE109井戸跡は10世紀後半となる。建物跡群との共伴関係は不明であるが、時期的にはSE140・200建物跡とSE107・109井戸跡、SB190建物跡とSE159井戸跡が使用時期を重複することになる。各土壙の時期もおおむね10世紀代に推定され、建物跡や井戸跡の時期とほぼ合致する。

母屋と付属する建物1～2棟、および倉庫、井戸、数基の土壙という集落の構成単位は、近年庄内地方では藤島町平形遺跡や遊佐町地正面遺跡などで検出されており、律令村落の普遍的な在り方となっている。各遺跡によって建物跡南北軸の方位が少しづつ異なっているが、これが時期的な差によるものか、集落の属する地域差によるものか、あるいは源訪神社と拓殖移民の関連などは今後に解明すべき重要な課題である。

2. 井戸跡について

庄内平野は、最上川等の大小河川による沖積地となり、広大な平野部を形成している。平野部には数多くの遺跡が点在しており、そのほとんどが平安時代以降の時期である。これらは、出羽国府跡に擬定される城輪柵跡を軸とした平安時代律令村落として位置付けされ、集落の構成では母屋1棟に付属する1~2棟の建物、倉庫跡1棟、井戸跡1基、土壇等で1単位となり、5~6単位が集落を形成するものと考えられる。ここでは本遺跡で検出された井戸跡3基を含め、庄内地方で調査された井戸跡について考えてみる。

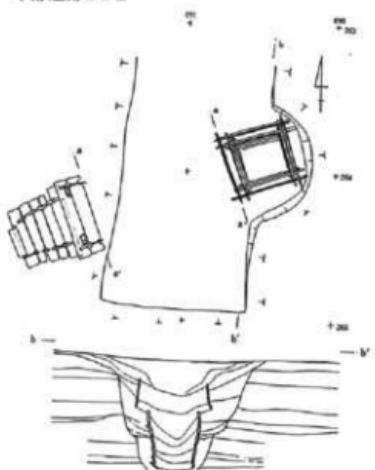
発見されている井戸跡は40基を数える(表12)。土器を伴出するものや、集落自体の時期により、9世紀中葉から鎌倉時代14世紀末葉までに至る。井戸は地下水を得るために施設であるが、施設された部分の用語が整理されていないため、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所刊行の研究ノート「草戸千軒」(註1)を参考に用語を統一して記する。

発見された井戸は、構造や形態でその時期の特徴としてとらえることが出来る。第21・22図はその時期を決定出来る井戸跡を集成して変遷したものである。Aタイプは井側(棒を地下部分に設置しているもの)が横板を方形(井桁・校倉)に組まれたもので、底部がすぼまり、上部は二段の横板を垂直に積み重ねているタイプ。Bタイプは横木や井筒の曲物を添えるものや、横板の井戸枠組を垂直に積み上げ添板を外側に打ち込んでいるもの。Cタイプは井戸枠組を構成する板が縦に打ち込まれているもので、四隅に角材(隅柱)があるものである。内側には角材が横に組まれるもの(横枝)も含む。Dタイプ掘り抜き井戸と思われるが、枠組等の上部施設が不明である。底面には河原石等を敷きつめているものも含まれる。

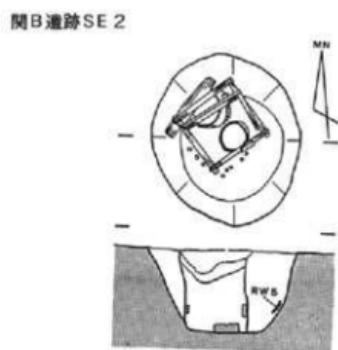
以上4つのタイプに分けてみたが、これらの時期はその伴出遺物によりAタイプを9世紀中葉から末葉にかけて、Bタイプは10世紀前葉から後半、Cタイプは11世紀から12・13世紀、Dタイプは14世紀以降の時期を示しているものと考えられる。古い時期の井戸枠組は丁寧な作りと、しっかりと組み方を示し、新らしくなるにつれ、雑な枠組を呈しているようである。組み方の変遷を見ると、井桁に組まれた井側→井側の外側に添板を打ち込むものや曲物を添えるもの→井側がなくなり、隅柱に横枝で添板をささえるもの→内部施設がなくなるものとに変化していくと考えられるがCタイプからDタイプにかけてはその時期が長く、この間に更に類例が入るものと思われるし、各タイプも細分されると考えている。今後の資料の増加で検討していきたい。では庄内地方で木材を利用する井戸跡が多く発見される要因を考えてみれば、推論となるが城輪柵跡が国府として建設されることにより、多量の木材が必要となつた。また建物も掘立柱や礎石建物となり、建物の外壁を作る板材の供給によりその板材が井戸跡を構築する一つの材料となったものと考えることが出来る。また遺跡が立地する地質によるものも要因として把えることが出来るが、今後検討を加えて述べたい。

註1 小部 鳥「草戸千軒町遺跡の井戸」-形態分類を中心として- 草戸千軒No.43 研究ノート 1977

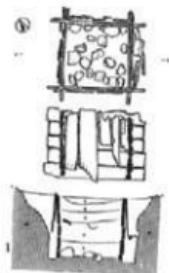
A タイプ



B タイプ



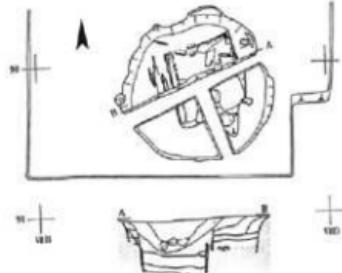
地正面遺跡
SE 3



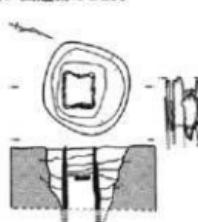
第21図 庄内地方の井戸跡(1) 80分の1

C
タ
イ
プ

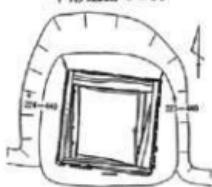
堂の前遺跡 SE001



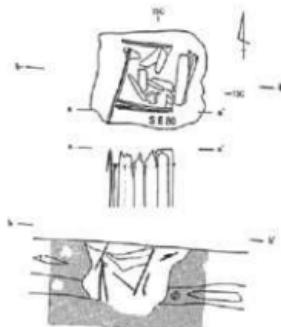
上ノ田遺跡 SE285



平形遺跡 SE39

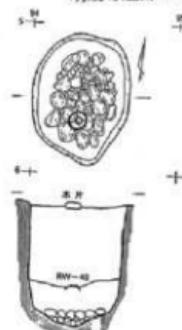


中京田遺跡 SE80



D
タ
イ
プ

明成寺遺跡 SE 1



第22図 庄内地方の井戸跡(2) 80分の1

表12 庄内地方井戸跡出土例一覧

番 号	通 路・遺構名	所 在 地	井			倒		掘 り 方		時 期	発 見 年 度	
			石材	形態	構 造	幅幅(深さ)cm	平面形	開口幅(深さ)cm				
1	地正面・S E 3	避笠・下小松・地正面	木組	方形	横板井桁	87×67 (90)	隅丸方形	210×190 (90)	10C 前半	1977		
2	上高田	*・高岡・上高田	*	?	縦板	?	?	?	?	?	?	
3	後出・S E 18	八幡・大島田・後田	方形	縱板・横枝	90×90 (105)	隅丸方形	132×120 (105)	平安後半	1978			
4	*・S E 210	*・*・*・*	*	縱板・横枝	90×90 (?)	略円形	214×181 (?)	*	*			
5	堂の前首次・S E 001	*・法蓮寺・堂の前	*	縱板・横枝	90×90 (50?)	椭円形	200×260 (70?)	*	1975			
6	堂の前第二次・S E 266	*・*・*・*	*	縦板	90×90 (45?)	円形	1600 (600?)	*	1979			
7	堂の前	*・*・*・*	*	縦板	?	?	?	?	?	1952?		
8	上ノ田1次・S E 285	酒田・堤野原・上ノ田	*	縦板・隅柱	45×45 (110)	隅丸方形	120×120 (130)	11C 前半	1978			
9	*・S E 321	*・*・*・*	*	縦板井桁	72×75 (160)	椭円形	220×250 (160)	10C 前半	*			
10	上ノ田2次・S E 501	*・*・*・*	*	縦板	90×90 (?)	隅丸方形	125×100 (?)	11C 前半	1979			
11	間B 1次・S E 2	*・間・北田	*	横板穴六(曲物)	90×90	椭円形	220×195 (105)	10C	1980			
12	*・S K 3	*・*・*・*	?	矢板のみ出土	?	*	195×180 (94)	10C	?			
13	北田2次・S E 107	*・*・*・*	?	?	?(曲物)	488.5 (25.3)	円形	420 (90)	10C 中葉	1981		
14	*・S E 109	*・*・*・*	木組	?	縦板井桁?	?	隅丸方形	130×130 (85)	10C 前半	*		
15	*・S E 159	*・*・*・*	木組	方形	縦板井桁	66×66 (72)	不整周円	190×145 (105)	10C 中葉	*		
16	新吉澤	*・新吉澤・家・障	*	*	*	?	?	?	?	?	平安時代?	
17	手藏田9	*・手藏田・今通北	*	*	*	?	?	?	?	?	1967	
18	明成寺・S E 1	*・農・田・明成寺	?	?	?	?	?	?	?	?	1979	
19	明成寺	*・*・*・*	木組	方形	縦板・隅柱	?	?	?	?	?	平安後半?	
20	城輪櫛7次・2号井#1	*・城輪・高平田	*	*	縦板・隅柱・横枝	83×94	隅丸方形	185×200	*	1973		
21	*・8次・1号井#1	*・*・*・*	*	縦板・横枝	97×11~ (190)	円形	420	*	*			
22	*・15次・1号土壤	*・*・*・大場	蒸餾器	?	?	?	?	?	?	?	1975	
23	*・3号土壤	*・*・*・*	*	円形	450	略円形	450 (90)	*	*			
24	*・16次・1号土壤	*・*・*・玉田	曲物	*	(曲物)	458 (60)	*	450 (140)	*	1976		
25	*・19次・1号井#1	*・刈邊・古川	木組	方形?	465	隅丸方形	168×180 (95)	*	1978			
26	*・*・2号井#1	*・*・*・*	?	円形	465	円形	463 (104)	*	*			
27	*・21次・1号井#1	*・城輪・宮形	木組	方形	縦板井桁	76×76 (90)	隅丸方形	?	?	1979		
28	*・*・1号井#1	*・城田	*	縦板・隅柱・横枝・蒸餾器	60×60	略円形	?	?	?	平安後半	1980	
29	*・22次・14-45井#1	*・刈邊・古川	*	縦板・横枝	100×160	*	460	*	*			
30	*・*・1号井#1	*・*・*・*	*	縦板	?	?	?	?	*			
31	*・*・17-16井#1	*・*・*・*	*	縦枝	87×87	略円形	?	?	*			
32	*・23次・1号井#1	*・城輪・高平田	*	縦板井桁	48×50 (45)	隅丸方形	95×95	?	*			
33	*・*・2号井#1	*・*・*・*	?	縦枝	55×55	*	100×105	?	*			
34	*・25次・38-1井#1	*・*・*・俵田	*	縦板・横枝	50×50 (172)	不整円形	460?	?	?	平安後半	1981	
35	*・*・31-62井#1	*・*・*・成田	*	縦板・隅柱・横枝	65×65	隅丸方形	200×207 (60)	*	*			
36	*・*・34-1-2井#1	*・*・*・*	木組	?	縦板	60?×60?	*	300×400	*	*		
37	桜林	平田・桜林・大坪	*	方形	縦板・隅柱・横枝・蒸餾器	81×81 (270)	?	?	*	1954		
38	下野山	松山・下野山・谷地田	?	?	(曲物)	460?	?	?	?	平安時代	1965	
39	中北目	*・中郷・中北目	木組	方形	縦板・隅柱・横枝・蒸餾器	75×75	?	?	(135)	*	1954	
40	三川	三川・横山・大正	*	?	(曲物)	?	?	?	?	?	?	
41	中京田・S E 80	鶴岡・中京田・大坪	木組	方形	縦板・横枝	90×90	椭円形	150×120 (100?)	鎌倉-室町	1972		
42	鶴壽寺・S E 105	鶴寿・長沼・生田前	木組	?	縦板・横枝	?	?	?	?	?	1978	
43	渡前	*・渡前・珍・堀	木組	方形	縦板・隅柱・横枝	?	?	?	?	?	平安後半	1969
44	平野F・S E 39	*・平野・白山前	*	縦板・横枝	130×133	隅丸方形	226×226 (140)	13C	1976			
45	平野G・S E 20	*・*・高畠	*	縦板・溝柱	90×90 (?)	*	117×118 (?)	鎌倉-室町	1977			
46	平野D・S E 2	*・*・*・野刀	*	縦板井桁	80×80 (115)	略円形	460 (290)	9C 中葉	*			
47	平野D'・S E 2	*・*・*・?	?	?	?	?	*	460 (115)	平安前半	1978		
48	上藤島	*・上藤島・六所神社	木組	兵方形	縦板井桁	84×86 (45?)	?	?	?	?	1950?	

図 版



北田遺跡遠景(東から)



北田遺跡近景(北東から)

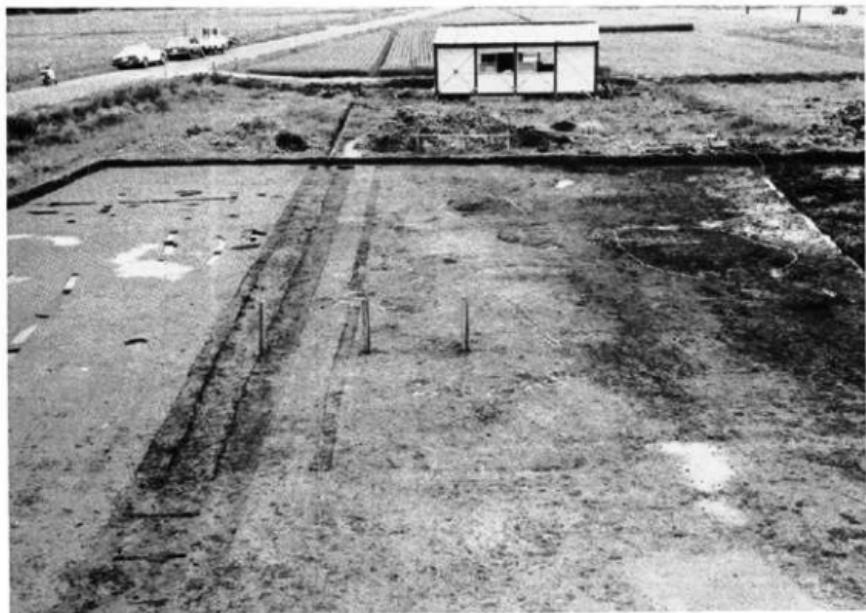




精査区近景(南から)



精査区北西側(南東から)



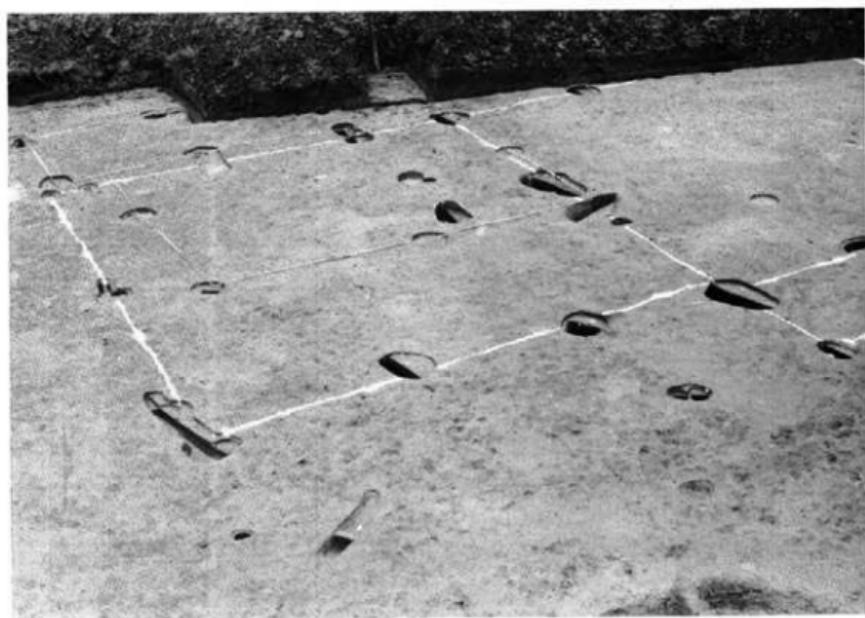
精査区南側(北から)



精査区北側(南から)



SB140建物跡(南東から)



SB180建物跡(東から)

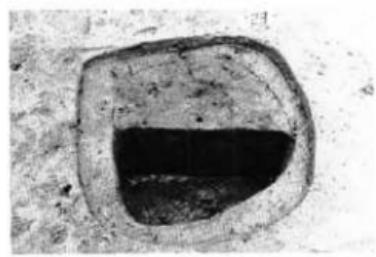
図版 6



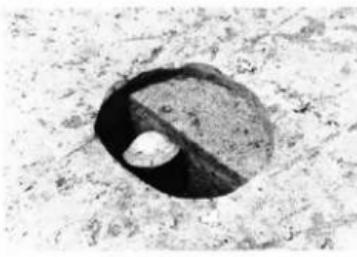
EB112



EB122



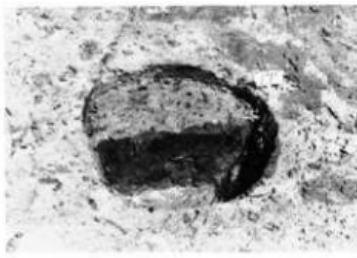
EB123



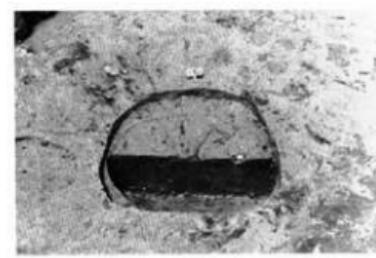
EB124



EB133



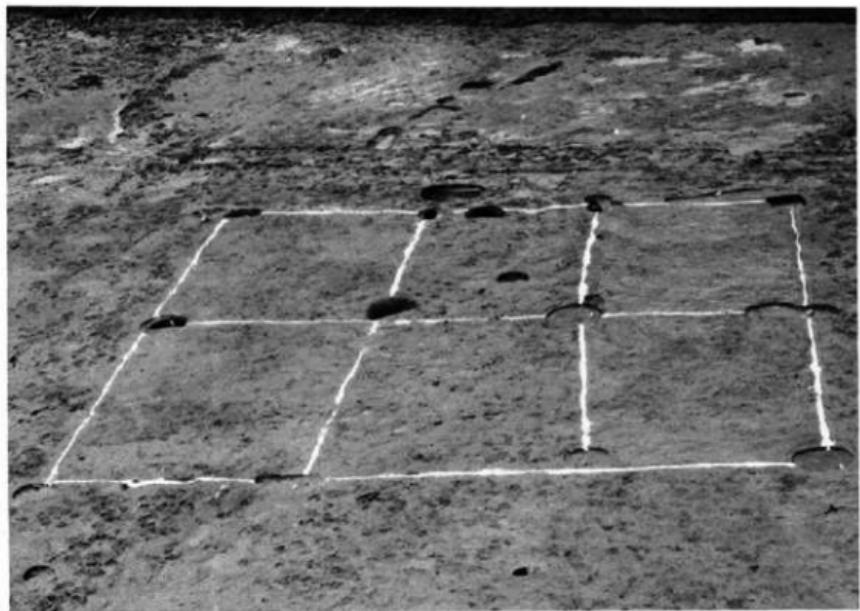
EB134



EB138



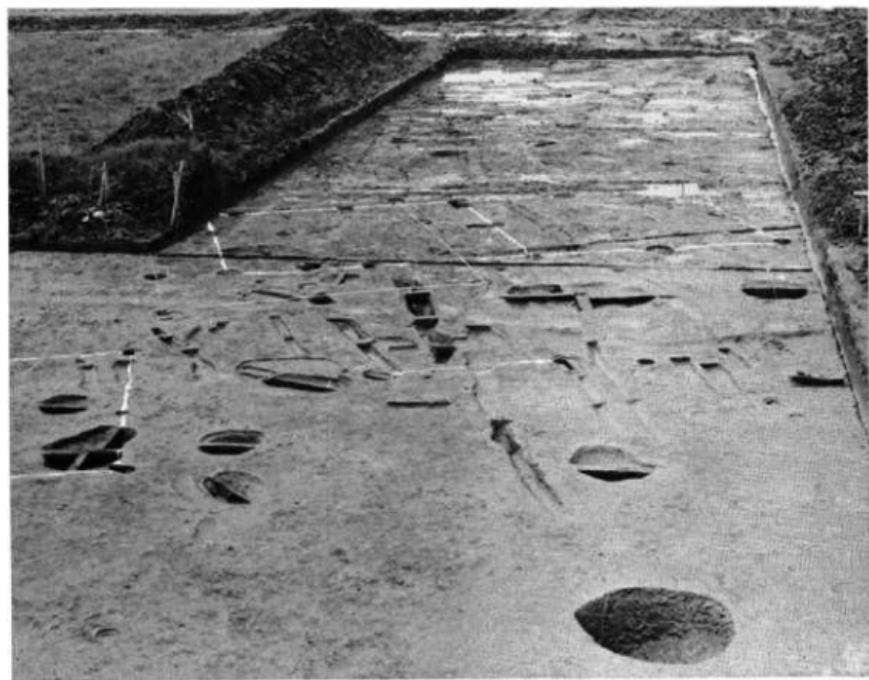
EB139



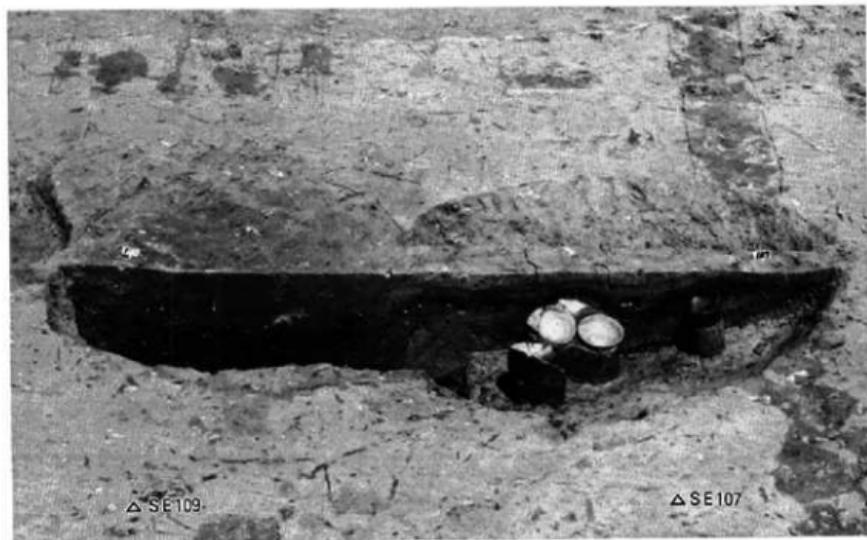
SB170建物跡(東から)



SB210建物跡(南から)



SB190・200建物跡(南から)



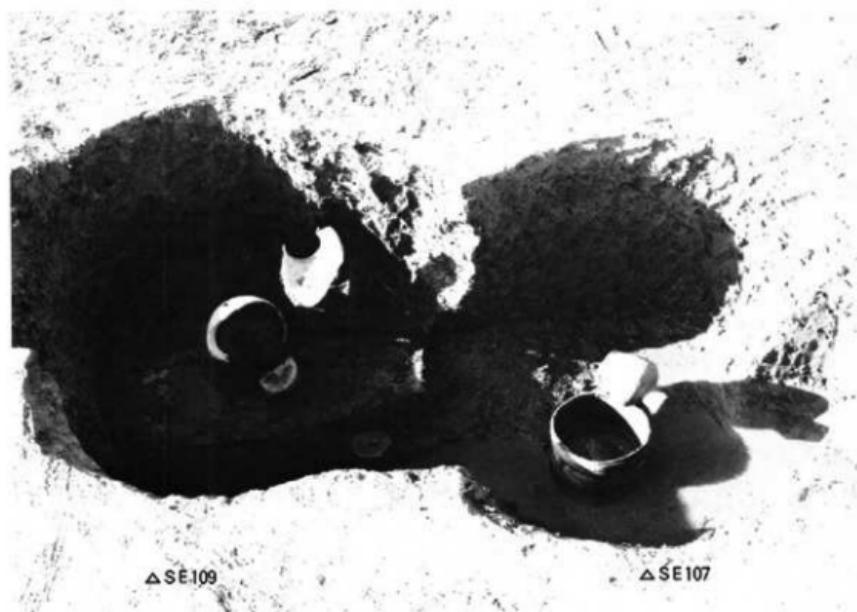
SE107・109井戸跡(南から)



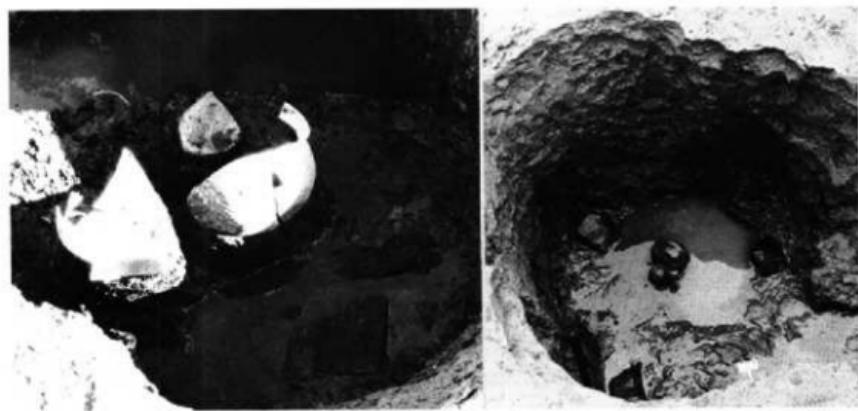
SE107・109井戸跡(南東から)



SE107井戸跡土層(南東から)



SE107・109井戸跡(南から)



SE109井戸跡遺物出土状況



SE159井戸跡(南から)



SE159井戸跡(西から)

図版 12

SK59土壤(南から)



SK60土壤(南西から)

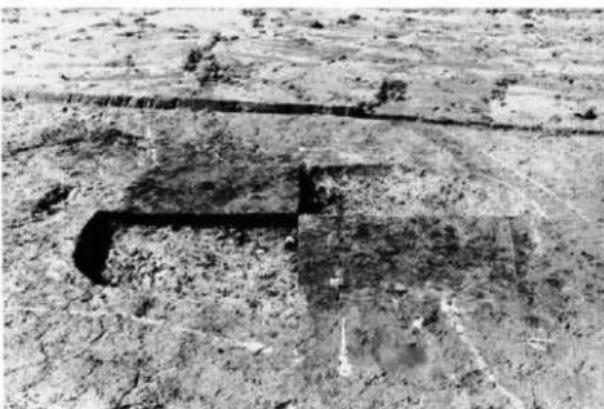


SK61土壤(北西から)



図版 13

SK63土壤(南から)



SK67土壤(南から)



SK95土壤(西から)



図版 14



SK108土壤(西から)



SK110土壤(南から)



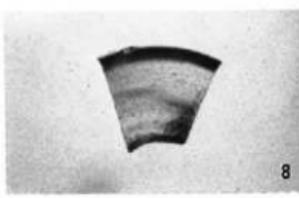
SD84溝状遺構(南から)

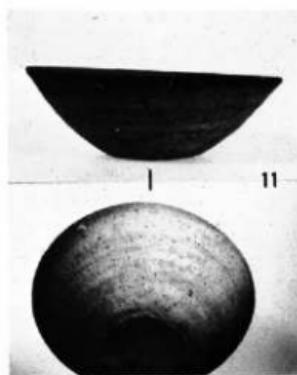


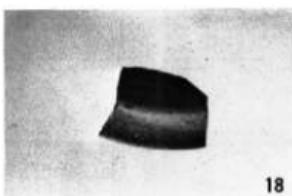
SD84溝状遺構(西から)

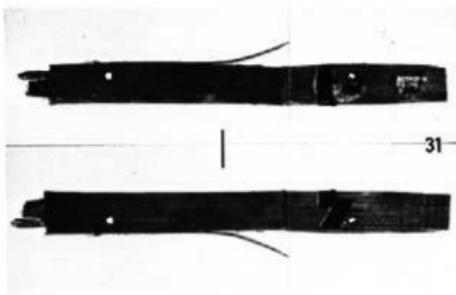
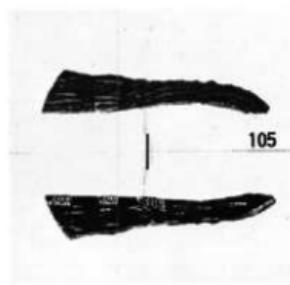
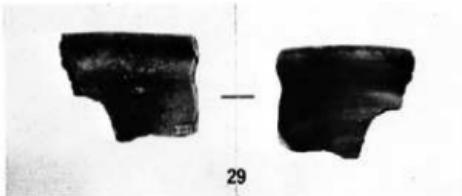
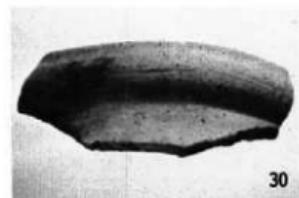
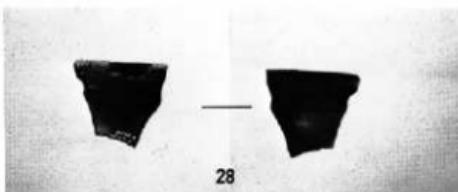


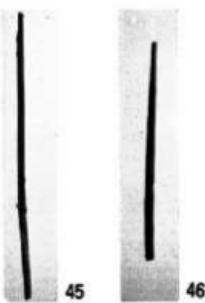
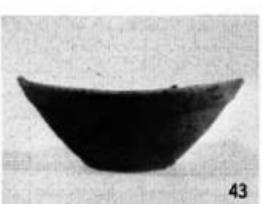
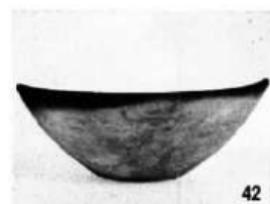
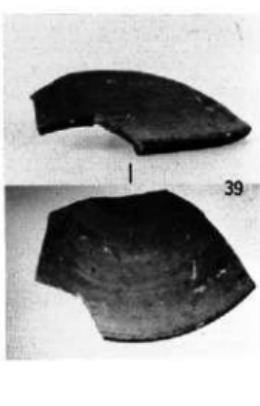
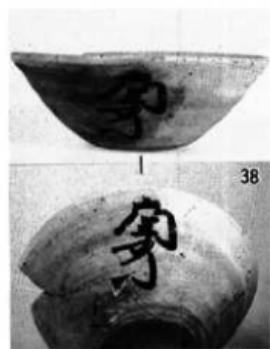
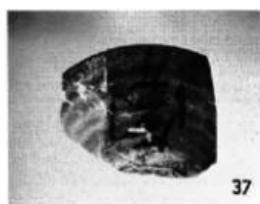
7











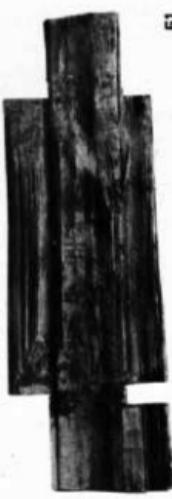
53



52



51



50



33



49



48



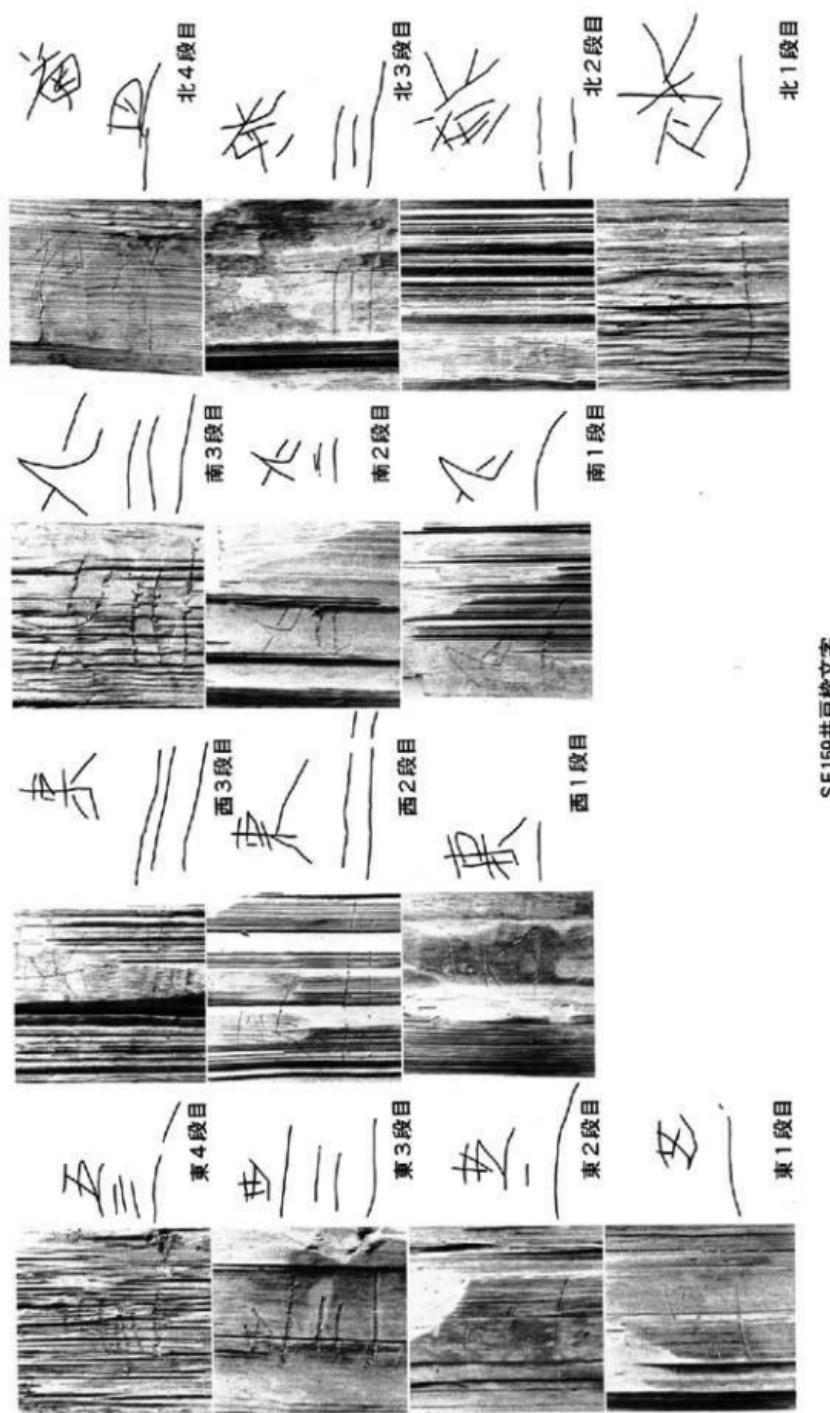
47



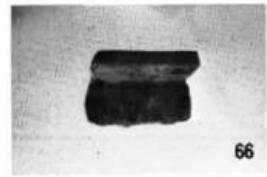
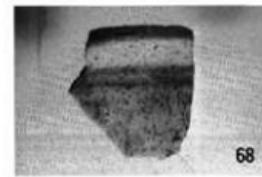
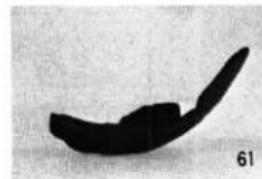
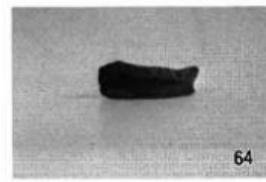
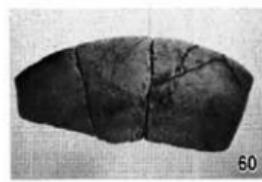
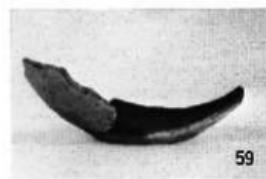
32

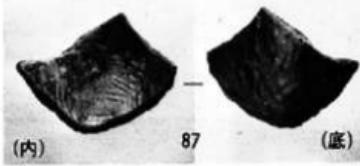
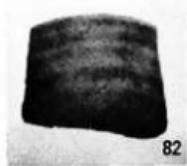
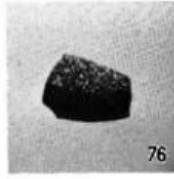
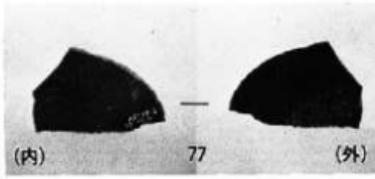
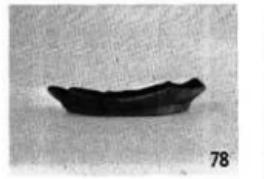
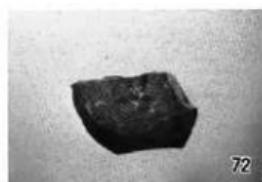
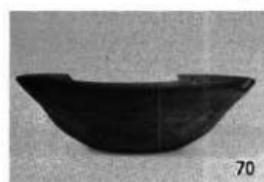


圖版 21



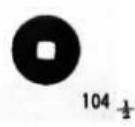
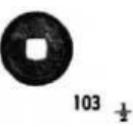
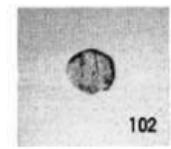
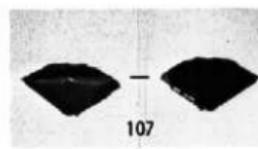
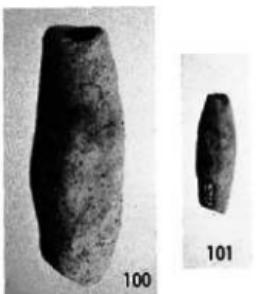
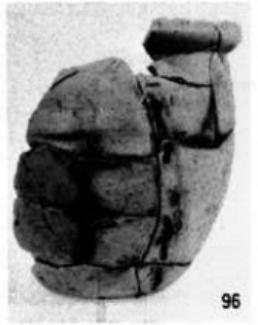
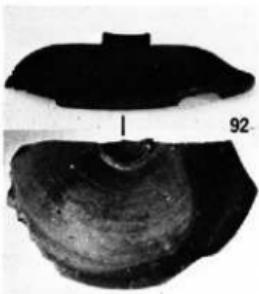
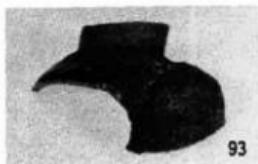
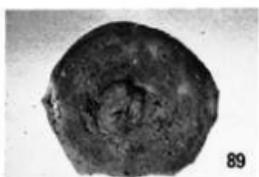
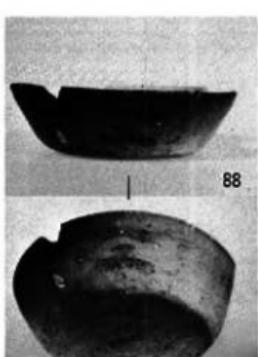
SEI59井戸幹文字





溝状構出土遺物

図版 24



包含層出土遺物

山形県埋蔵文化財調査報告書 第53集

北 田 遺 跡
第2次発掘調査報告書

昭和57年3月25日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会
印刷 鶴岡印刷株式会社
鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080 円
